

Japan Society of  
the Graded Direct Method  
and Basic English

No. 70

# Year Book

2018年6月

発行：GDM 英語教授法研究会／日本ベーシック・イングリッシュ協会 編集：伊達民和

東日本支部 〒226-0005 神奈川県横浜市緑区竹山3-1-8-3102-233 加藤准子方 Tel/Fax : 045-934-8314

西日本支部 〒567-0034 茨木市中穂積1-5-B-605 此枝洋子方 Tel : 080-8167-1993

<http://www.gdm-japan.net/>

## 卷頭言

伊達民和

2001～2002年の6月までシカゴの大学に留学していた京都大学経済学部のA助教授が留学から帰国する直前、2年間も米国に居て英語が喋れないと恥ずかしい思いをすると懸念し、一念発起して2002年7月～8月の2か月間、Columbia大学が運営するALP(American Language Program)の夏季講座に参加。彼の話す英語は「一時期TVコマーシャルで有名になった駅前留学の英語」同様、ユー・ドロップ・ハンカチ式の発音。同じクラスに居た世界中から来た若い学生のみならず、先生までもがその発音に爆笑また爆笑。しかしある瞬間からこの爆笑＝軽蔑が、尊敬に変わった。その場面はテスト。speakingでは立て板に水の学生もwriting、しかもlogical writingになると全くお手上げ状態。与えられたテーマに対して何を書いてよいかさっぱり。文章の最初の出だしも浮かばない。シーンとしている中で、独り、A助教授が走らせる鉛筆の流れのような音がサラサラサラと。一枚書き、二枚目に移りまたサラサラサラ…。

このクラスの最後の日に先生が話したことは大学ではspeakingも大事だが、writingはもっと大事。このAさんのことを皆で笑っていたけど、彼が書いた答案を読んで他の先生一同がその論旨の明確さ、文章の正確さ、格調に吃驚したこと。そして学生一同等しくA助教授を見直した（この文は、後に紹介している友人からのメールの引用である）。

## 内容

卷頭言	伊達 民和	1
2020年小学校英語科スタート～どんな英語を学ぶのか～	松浦 克己	2
GDM授業におけるライティングを見直す	吉沢 郁生	7
語彙と文法	相沢 佳子	12
Cross-Cultural Contextで考えるEnglishとBasic English		
—日本・元禄時代物語『忠臣蔵』(英文版)を題材として—	後藤 寛	19
発音クリニック雑感	麻田 晓枝	34
Sir Isaac Newton	加藤 准子	36
大学入学共通テストへの、外部試験導入の動き その問題点	中山 滋樹	39
ある外資系企業の経営者の嘆き	伊達 民和	48
支部活動報告(東日本支部&西日本支部)		52
編集後記		55

# 2020年小学校英語科スタート～どんな英語を学ぶのか～

松浦克己

## はじめに

2020年度から現在小学校で行われている外国語活動が教科として実施される。実際には今年度から先行実施をすることが可能である。しかし教科書はまだないので、文部科学省からそれに代わる資料（教材）が出ている。その資料は扱う語彙や教える文も細かく示している。文部科学省が示したものなので来年発表される各教科書は、この資料で示されている語彙や文から大きく離れることはできないと思われる。このことから今後10数年における日本の英語教育で児童が最初の2年で学ぶ英語は、おおよそこの文部科学省から示されている資料の英語ということになる。扱う語数については学習指導要領で600語から700語程度と示されている。また文についても指導要領とその解説書において文の種類や時制など細かく例示されており、それをもとにこの資料で具体的に示されている。まず語彙から具体的に見ていくことにする。この資料は少しづつ修正されており、今回は昨年6月頃に示されたもので話を進めていく。

## 1. どんな単語を

昨年6月ごろに示された「新教材で使われる語彙一覧 カテゴリー分類」では、656語を使って英語の授業を進めることになっている。この一覧では以下に示す17に分類して示している。

表の中の未数は、そのカテゴリーの語の中で今使われている検定教科書の*New Horizon*では中学校3年間をとおして習わない語の数である。

表1

	カテゴリー	語数	主な語	未数	主な語
1	動作	55	buy cook like play see go study run speak enjoy get want take walk have visit	3	wake brush jump
2	状態・気持ち	63	big favorite fun much good fine nice popular kind sad happy delicious small open	15	active bitter furry salty brave scary round fantastic sour cheerful
3	飲食物	66	egg apple coffee tea food cake meat lemon soup fish milk cherry orange juice	43	bacon grilled fish carrot macaroni parfait corn mushroom nut
4	数	50	one two hundred first fifth	0	
5	学校生活	53	math club room gym pen letter library office subject class school music eraser	20	recess economics ink school nurse principal stapler glue stick ruler
6	町・施設・職業	56	bridge house hospital doctor temple museum town corner zoo street bus teacher park	24	florist baker yacht vet comedian farmer pilot astronaut queen exit

	カテゴリー	語数	主な語	未数	主な語
7	日常生活	45	bat desk cup book bag box watch piano dinner lunch breakfast chair table home	18	bicycle garbage shirt boots rain boots pants sneakers raincoat hat
8	スポーツ	29	soccer tennis team racket sport	18	athletics rugby boxing
9	色・形	19	color black green red white star	6	rectangle cross diamond
10	季節・月・曜日・時間	31	spring summer fall winter time day year morning afternoon	1	autumn
11	国	17	Australia Canada India Japan	6	Egypt Korea Spain Peru
12	動植物	28	animal bear cat dog panda tree	18	raccoon dog grasshopper
13	自然・天気	14	lake mountain river sea sun cloudy sunny weather rainy	2	snowy rainbow
14	祝祭日・趣味・遊び	23	fishing camping ball game card shopping festival reading	12	firework Boy's Festival marble tag unicycle hiking
15	人と身体	32	I my me you your we our us he she boy girl ear hand head	5	toe teeth shoulder knee nose
16	その他抽象語	18	birthday culture left right place	5	hint luck stroke nickname
17	その他ことば	57	it that this a the is am are can do at by for from in on to would what when where who why how let's not be very	1	inside
		計 656 語		計 197 語	

現行の検定教科書では中学3年間（週4時間）で約1,200語を学習する。小学2年間（週2時間）で使用する約650という数は基本的に多い。カテゴリー別に教えるわけではないので学習者には直接的な影響はないが、人称代名詞の I, you, we, he, she が「15 人と身体」のカテゴリーに入っている、it が別のカテゴリー（17 その他 ことば）で this, that と一緒にになっているのは、小学校の教師で英語が得意ではない人に誤解されやすいのではないか心配である。英語の this は日本語の「これ」に、that は「あれ・それ」にあたる内容だが、日本語を使って「これ this あれ that それ it」と1対1対応で教えてしまうことが予想される。

his, her を教えないのはどういう意図なのかまったく分からぬ。また they がないのも不自然で、his, her, they を教えずに、英語学習の初めの2年間の学習が行われるのは、学習者に

とって不幸なことである。

## 2. どんな文を

小学校の英語科ではどんな文をどんな順で学習していくか。文科省が平成29年4月に示した小学5年生の70時間分の活動例から見てみる。いちばん右の列（※）は、その文が現行の*New Horizon* のどこで初出かを記している。1年のunitの数は11ある。2年は7units。「→1⑤」は、単元1の⑤で初出しているということを表している。

表2

時数	單 元 名	表 現 例	※
単元1 8時間	How do you spell it? アルファベット 自己紹介	①Hello, I'm Saki. Nice to meet you. ②My name is Kosei. ③How do you spell it? ④I like / don't like blue. ⑤What sport do you like? I like soccer very much. ⑥I have old balls. I want a new ball.	U1 U2 U2 U10 U3 U5 U4 U3
単元2 7時間	When is your birthday? 行事・誕生日	①When is your birthday? My birthday is March 1 st. ②Do you like soccer? Yes, I do. No, I don't. ③What sport do you like? Do you want a ball? ④What do you want for your birthday? ⑤I want a pen. Here you are. ⑥Thank you. You're welcome. Happy birthday.	U10 U3 →1⑤ U5 U2
単元3 7時間	What do you have on Monday? 学校生活・教科・職業	①Do you have P.E. on Monday? ②Yes, I do. No, I don't. ③What do you have on Monday? ④I study math. ⑤Are you a teacher? Yes, I am. No, I'm not. ⑥I'm a nurse.	U6 →2② →1⑤ U3 U1 U2
単元4 8時間	What time do you get up? 一日の生活	①What time do you get up? ②I usually get up at 7:00. ③I always wash the dishes.	U7 U9 U9
単元5 8時間	She can run fast. He can jump high. できること	①Can you sing well? Yes, I can. No, I can't. ②I / You / He / She can sing well. ③I / You / He / She can't sing well.	U10 U2
単元6 8時間	I want to go to Italy. 行ってみたい国や地域	①Where do you want to go? ②I want to go to Italy. ③Why? I want to see / go to / visit Rome. ④I want to eat spaghetti. I want to buy a soccer ball. ⑤You can play soccer. It's cool.	U8 2年 U3 2年 U3 2年 U3 →5②
単元7 8時間	Where is the treasure? 位置と場所	①Where is the treasure? ②Go straight for three blocks. ③Turn right / left at the third corner. ④You can see it on your right / left. ⑤It's on / in / under / by the desk.	→6① U9 U9 U9 U8

時数	単元名	表現例	※
単元8 8時間	What would you like? 料理・値段・一日の生活	①What would you like? What food would you like? ②I'd like spaghetti. ③This is my special menu. What is your special menu? ④It's for my brother. How much? It's 100 yen.	3年U1 2年U7
単元9 8時間	Who is your hero? あこがれの人	①Who is your hero? This is my hero. ②He / She is good at playing tennis. He is a good tennis player. He can cook well. He is kind. ③Can you play baseball well? Are you a good baseball player? Why? He is cool.	U7 be good at 未出 2年U6

単元1から単元8までは、単元5のcanの文を除けば、主語がIとYouの文ばかりである。やっと最後の単元9でHe / She isの文を使うことになっている。ただこのHe / Sheはあこがれの人なので、その場にはいない。1年間70時間学習しても同じ教室にいる友達のことについてHe / Sheで始める文を使って実際の情報を伝えあうことはないという学習内容である。新学習指導要領で言われている「実際に英語を用いた言語活動をとおして」の内容としてはいびつな偏った活動内容である。

表2の指導順序が教科としての指導順序という観点から考えられたものではないことは、検定教科書の一つであるNew Horizonの指導順序と比べるまでもなく明らかである。教科として現在の中学校3年間で指導していたのが、小学5年からスタートして中学3年までの5年間で系統的に教科として教えていくという当たり前のことが、今回の英語の教科化では考えられていないことが分かる。文部科学省自らが、「前倒しはしない」と明言しており、その内容は表2から明白なように英語学習の基礎にはなっていない。また、内容の定着も求めていない。よって週2時間の英語科の学習というよりは、現在の週1時間の外国語活動が2時間に増えただけで、今までとおなじように学習内容については小中の連携やつながり、接続といったことは考えられていない。

### 3. どんな状況が、どんな対策が

アクティブ・ラーニングすなわち「主体的・対話的で深い学び」は活動の形態や取り組み方だけで達成されるわけではない。5年生の活動例を見ると、自己紹介、誕生日、学校生活、行きたい国、好きな料理など、言語活動がしやすい、興味を持たせやすい内容となっている。しかしその活動をとおして身についた英語はどのようなものなのか。「深い学び」にいたるには、授業で使う英語、その結果身についた英語そのものが大きなポイントとなる。つまり小学校2年間で身についた英語が、その後の英語学習においてどれだけ土台として有用なものか、またそれをもとにどのように英語力が伸びていくのかといった観点からの検討が必要である。現在示されている5、6年の活動例には、残念ながらこの観点からの文科省の（制作した出版社の）方針や意図は読み取れない。

70時間も学習させるにもかかわらず、その定着は第1優先としないという考え方は、小学校の指導者の現在の状況を考えれば理解できるものではあるが、そのツケが学習者にまわって

くるのであれば非常に問題である。学習する内容が学問としてつながっていなければ、小学校2年間の学習は効果のあるものにはならない。本来は教科としてその内容的な小中のつながりは教科書として備わっていないなければならない（他の教科を見れば当たり前のことであるが、そうなっていない2020年度からの小中5年間の英語学習では、このことについて小中連携でうまく考えて取り組んだ中学校区の生徒とそうでない校区の生徒の学校区間格差が大きくなることが心配である。

また今よりも英語嫌いが増えるのを心配する声もよく耳にする。そうなれば、ますます中学1年の最初の部分の重要性が増してくる。小学校で学習した（活動した）内容をもう一度復習することを中学校の英語学習の最初に行うという活動計画もよく目にする。この活動は一見効果的にみえるが、英語嫌いになった生徒の目線で見てみるとどうだろうか。嫌いになったことをまた同じようなやり方で出されても、普通は苦手意識や消極的な姿勢が克服される可能性は少ないとと思われる。このことは英語の苦手な生徒の多い高校でのいろいろな実践が証明しているのではないか。やはり嫌いになったときとは違った別のアプローチが必要である。また、得意だと思っている生徒に対しても、同じようなことをまた復習しても、内容的にそんなに深く扱うわけではないので、中学校の学習に対する新鮮さもなく意欲が向上するとも思われない。このような観点からGDMのような教科書とは違ったアプローチの教授法を活用することは、学習したことを整理し直したり、扱っていないことを補充したりするのにとても有効であると言える。



# GDM 授業におけるライティングを見直す

吉沢 郁生

『GDM 英語教授法の理論と実際』において、ライティングの活動について、私は次のように書きました。

GDM は文型中心の指導法なので、writingにおいても sentence 単位のものになることが多い。ごく初期においては、文字や文を書き写す作業をていねいに行うが、まとまった量の書く練習も少しずつ入れていくとよい。また、進度に応じて、生徒の自己表現としての writing を授業の中に位置づけることは生徒の気分転換になる上、表現したものを生徒に読ませることで、新たな学習意欲をほりおこすことにもつながる<sup>1)</sup>。(下線引用者)

これに関して、本稿では次の 3 点について掘り下げます。

- 1) 文字や文を書き写す作業をていねいに行うため、さらに、たくさん書かせるために私はノートとワークシートを併用している。どのように使っているか。
- 2) 生徒のエラーに出合った時にどうしたらよいか。
- 3) 自己表現としての writing を授業の中に位置づけるにはどうしたらよいか。

## ノートとワークシートの併用

GDM の teacher training の場では、oral での導入部分を実際にやってみることが主流になっています。ライティングについては、ワークシートを配ることもありますが、それに立ち入って検討することは少ないようです。

実際に子供たちを GDM で教えている人たちは、日々、どのようにライティングさせるかを考えています。そのノウハウがもっと共有されるとよいでしょう。

私の場合は、ノートとワークシートを併用します。中学 1 年の新学期に GDM で始める場合は、特に念入りにノート指導をします。

- ◎市販の大学ノート (B5 版) に 4 行おきに赤で基準線を引かせます<sup>2)</sup>。
- ◎文字は罫線に沿って書かせ、基準線の上に出るのか、下に出るのかをチェックします。
- ◎文頭の大文字やピリオドも丁寧にチェックします。
- ◎センテンスを書かせる時は、絵も描かせます (高校生にもなると面倒くさがる生徒もいますが、この方針は変えません)。

ワークシートも併用します<sup>3)</sup>。次のような特徴があります。

- ◎板書してノートに書かせる以外の多様な場面を与えることができる。
- ◎新出事項にポイントを絞って作られているので、その項目の定着をチェックしやすい。
- ◎ただし、先に進むにつれ「穴埋め」の形式が多くなるので、これだけに頼るとフルセンテンスを書かせるチャンスが減る。

授業の中でどのように使ったらよいでしょうか。

- 1) 中学1年生を受け持った時は、まず板書した絵と英文をノートに写させました。そして、早く書き終えた生徒が手持ち無沙汰にならないように、ワークシートをやらせていました。ワークシートは全員に配っておきます。授業時間内に終わらなかった部分は宿題とします。
- 2) 高校生にGDMで教えた時は、ワークシートをまずやらせました。短時間でできてしまいますが、授業時間内にチェックして回りました。早く終わった生徒は、ノートに板書を写す作業をさせたり、絵と英文で創作する課題をさせたりしました。
- 3) 学習者の年齢にかかわらず、正確に書かせることが大事です。そのために、どのようにチェックするかを考えておくことが必要です。ワークシートは、その時間の最後で読み上げて答え合わせをしたり、その流れでコーラスリーディングの材料にしたこともあります。宿題にした場合は、次の時間に答えあわせする時間をとります。回収して教師が答えをつけるのは、人数が多いと大変な作業になりますので、工夫が必要です。ノートについても、適宜、集めてチェックします。
- 4) ノートとワークシートを併用することで、たくさん書かせることができます。
- 5) 自由に書かせる場面も必要です。自分が習った言語材料を使って、書く中身も自分で考えて書く。そのためにはノートというツールがとても便利です。ワークシートも、creativeな課題を含めるようにするとよいでしょう。

### 生徒のエラーに向き合う

Oralで導入し、文字の提示し、センテンスが読めるようになると、ライティングに移ります。生徒が書いている時間は、教師にとっては指導の時間です。生徒のノートを見てまわり、書き間違いや不適切な答えができるだけその場で見つけて直させます。時間の余裕がある場合は、できるだけ、生徒にその場で書き終わるまで見守るようにしましょう。

個別に見てまわることで、エラーの多い生徒、はやく書けてしまう生徒が次第にわかってきます。

生徒の中には理解が不十分な生徒もいます。その場合は、間違いを指摘するだけでなく、その生徒の机の横に立ち止まり、少しの時間をとります。例えば、inとonの違いを間違えている生徒がいるとします。ペンを手に持ってみせて、“My pen is in my hand.”それを机の上に置いて、“Now it is on the table.”というふうに実演して見せて、言わせてみます。それからワークシートに戻り、間違っている箇所を指し示します<sup>4)</sup>。

「理解の不十分さ」にはいろいろな原因があります。大勢の中では理解が苦手だけれども、一対一の関係の中では理解できるという生徒もいます。個別にふれる時間を少しでもとることは、生徒を理解する上で役に立ちます。書かせている時間の個別指導はそのような面でも意義があります。

生徒は間違える存在です。たくさん書かせたり、フルセンテンスで書かせると当然エラーが出現する割合は多くなります。エラーは、生徒が正しい理解に至るまでの、ある段階での理解の度合いを示しています。それに付き合うことで、生徒がどのような理解の仕方をしているか、どこでつまずいているかを発見することができます。

大勢の生徒に共通するエラーがあった場合、書く作業に入るまでの練習が不十分だったか、

導入がうまくいってなかつた可能性もあります。それを取り入れて、次の授業プランに活かすことができます。

### Creativeなライティング活動

『理論と実際』には、いくつかのアイデアが載っています。絵と英文で4コマのストーリーを作らせるのは、GDMのごく初期の時点でのことのできるcreativeなライティング活動の一つです<sup>5)</sup>。

1つの絵についていろいろなセンテンスを表出する練習をoralだけでなく、ライティングにも持ち込むことができます。

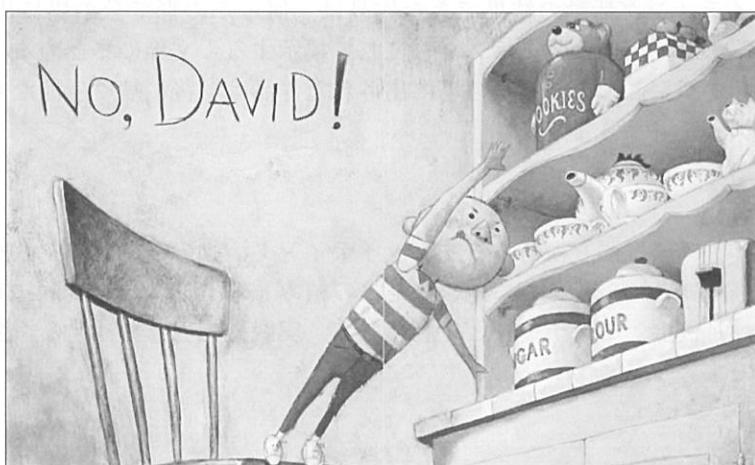
その時点で生徒が使える言語材料を考慮して、教師が絵を描いてもいいですが、たまには、英語の絵本を使うのも良い方法です。絵本はプロの作家の作った芸術作品であり、その絵は大きな力を持っています。例えば、下図は*No, David!*の一場面です<sup>6)</sup>。

There are some bottles and pots on the shelves. One of them is red.

David is on the seat. He is putting his hand up. What will he take from the shelves?

His mother said, "No, David!"

絵本の中の言葉は"No, David!"だけですが、絵に描かれているものを英語で言い表す練習に使えます。



GDMのgradingに沿うという立場からすると、このような絵本を使う場合は、絵に描かれているものが、新しい内容語をすこし教えるだけで、あとは既習の言語材料で言えるかどうかという観点で選ぶことが必要です。

私の場合、授業の中でcreativeなライティング活動の時間を確保するようにプランを立てます。そして、書きつつある生徒につきあいながら、主に次の3つのことを心がけます<sup>7)</sup>。

- 1) 生徒が書いている中身に教師が共感し、好奇心を示す。
- 2) 生徒が書いている英文のエラーを直したり、より良い表現のアドバイスをする。
- 3) 生徒が書き上げた作品について、より具体的でリアルな作品になるようなアドバイスを

を与えて、revise させる。

前述したように、自由に書かせると必然的にエラーが出てきます。しかし、GDM は他の教授法・指導法にくらべると、エラーの出にくいシステムになっています。それは、生徒たちが、習った言語事項の範囲内で書こうとするからです。言い換えると、新しく教わった語を実際の場面や絵の場面で使う、という思考回路の中で学んできています。ですから、毎回の授業で聞くこと・話すこと・読むこと・書くことを丁寧にやって、しっかり定着させておけばよいのです。生徒はその範囲で表現したがります。

逆に言うと、生徒たちにまだ教えていないことを刺激しないことが大事です。GDM でない教え方では、「書きたいこと」の中身は、自分の言語知識とは別のものとして発想します。「書きたいこと」と英語力との間に大きな隔たりがあり、それゆえにエラーも多くなるのです<sup>8)</sup>。

授業の中で、書きつつある生徒に少しでも付き合うことをしておくと、その後作品を集めてからのチェックがとても楽になります。生徒がどのようなことについて書いているか、どのようなエラーをする傾向があるか少しあはわかっているからです。ところが、宿題として書かせたものを提出させると、そのような前提の情報なしに添削することになりますから、うんざりしてしまう。その結果、このような活動を敬遠してしまうことになります。

Creative なライティング活動の結果できた作品は、何らかの形で公の場に出したいものです。クラスで回覧する、よい作品をポスターにして掲示する、文集にまとめる、などいろいろな方法が考えられます。このように公の場に出された作品は、後に続く生徒たちにとってのライティングのモデルにもなります。

## 実践の交流と共有

自分一人のアイデアには限りがあります。ライティング活動のアイデア、教室での生徒たちの様子、教師の働きかけ方などは、多くの実践の積み重ねを通じて洗練されていきます。ニュースレター、月例会、セミナーなどを利用して、実践を発表し共有する機会を作るよう心がけたいものです。

## 注

- 1) 片桐ユズル・吉沢郁生編著『GDM 英語教授法の理論と実際』(松柏社, 1999) p.155.
- 2) 市販の英習字用ノートは、罫線の幅が狭すぎると感じています。最近は、パソコンで罫線を引くことが容易にできるようになりましたので、自作してもよいかもしれません。
- 3) 最近出たものに、新井等『500 Pictures for GDM Teachers to Copy—GDM で教え学ぶためのイラスト集』(牧歌舎東京本部, 2017) があります。拙著のものもありますが、絶版で入手しにくいようです。吉沢郁生『やるぞ！中学英語ワークシート（1年）』『同（2年）』『同（3年）』(学事出版, 2006)
- 4) このような場合でも、GDM で授業を進めている間は、日本語は使用しないようにしています。
- 5) 片桐ユズル・吉沢郁生,前掲書, pp.159-160.
- 6) David Shannon, *No, David!*, Blue Sky Pr, 1998. 画像は下記より引用。  
<https://www.the-best-childrens-books.org/No-David.html>

- 7) 私はこの方法論を、米国の作文教育の研究者 Donald Graves の提唱した Writing Workshop のアプローチから学びました。ラルフ・フレッチャー & ジョアン・ポータルピ（小坂敦子・吉田新一郎訳）『ライティング・ワークショップ—「書く」ことが好きになる教え方・学び方』（新評論、2007）
- 8) 吉沢郁生「『言いたいこと』と英語力の間」Year Book No.68 (GDM 英語教授法研究会／日本ベーシック・イングリッシュ協会, 2016) に掲載。



## 語彙と文法

相沢 佳子

言語を構成しているのは単語とそれらを並べて文を作る規則、つまり文法である。話すことばでの音声を別にすれば、外国語を習得するのも単語と文法が問題となる。今回はこの語彙と文法の関係について考えてみたい。なお語彙（vocabulary）とはあるまとまりとしての単語の集合体を指す。語彙が豊だと言うのと単語をたくさん知っていると言うのは同じことである。本文では1)これまで語彙と文法はどのように見られてきたか、その理論の紹介、2)実際にこの2つの関係、そして文法化とは、3)多数の語の中でも core vocabulary と言われる一群の語について、そして Basic との係わりについて考えてみたい。

1) lexis and grammar という問題が取り上げられてきた。lexis とは語彙の学術的な用語で、文法に対してある言語、ここでは英語の語彙を指す。この語彙と文法の関係はどうあるべきかについていろいろな理論が出てきているのでその歩みを見てみよう。

### ①Lexicogrammar (Halliday 1961<sup>1)</sup>)

これは構造や形式を重視する形式文法に対して伝達行為の中でことばがどう機能しているかに注目した考えである。それまで単語と文法は別個のものとして考えられてきたが、それに対して語と文法との継続性を唱えた。語は文法の一部で、語の方を文法の枠組みに入れるべきだという。語はそれ自体で文法を持っている。例えば動詞でも、動詞だけ (laugh, swim), 目的語1つ (make, wash) または2つ (award, give) をとるなど決まりがある。文法的枠組みの中でこのような語の型にもっと注意を払うべきという考えである。

### ②Lexical Grammar (J.M. Sinclair 1991 他<sup>2)</sup>)

1970年代頃からコンピューターを使った大量の言語資料を集めたコーパスが大きく取り上げられ、言語の研究にもそれが活用されるようになってきた。実際に使われていることばの資料から言語の新しい様相が分かってきた。結論として言語は語と文法との切り離せない複合体で、高度に pattern 化されている。語と文法の分離は言語の性質にとって基本的ではない。テキストの中で意味はどう生じるか。言語の使用者は語を文の中にたらめに入れないのでない。意味は idiom 原理（ある一語はそのまわりの語に影響する）によってテキストの中で生じる。さらにコーパスの資料から実際の言語使用では単語一語だけでなく、単語のまとまり phrase (句) として意味を表わしていることが多いことも判明した。例えば、of course も sure, perhaps, maybe などと同様ひとまとまりの意味を表している。一語ずつの意味とは異なる kick the bucket (死ぬ), It rains cats and dogs (雨がどしゃぶりに降る) などの idiom も多く、また skate という語は ice や roller と結びつきやすいなどの collocation (結び付き) も大きく働いている。そしてこれらは非母語話者には極めて難しい。外国語学習ではこのような lexical phrase の学習の重要性を考えるべきだという。つまりここでは語彙と文法を同等の基盤に置くだけでなく、文法の枠組みの中で語がどう型にはまるかをみている。

### ③Lexical Approach (L.M. Lewis 1993<sup>3)</sup>)

Lewis はこの題名で本を書き、副題を The State of ELT and a Way Forward (英語教育の状

況と進む方向)としている。これもコーパスの結果を利用しているが、上記の①、②よりさらに語彙重視に進み、実際に自然に使われている言語では語彙の理解がもっと重要と主張している。言語は lexicalized grammar (語から成る文法)ではなく、grammaticalized lexis (文法化された語)と考える。ことばの多くは②でも取り上げられたが multi-word 'chunks' (一語以上のかたまり)で、母語話者の英語では 55% 以上がこのような chunks から成ることのこと。そのような語のかたまりの例として、複合語 (upside down, in the least), 句動詞 (go up, look at), 語の結びつき (rancid butter / cheese / \*apple), お決まりの言い方 (not yet, just a moment)などを挙げている。語の結びつき collocation の例で「腐った」という意味の rancid は主に乳製品などに使い野菜や果物などとは使われない。母語話者はこれら chunks の豊かな目録を自然に身に付けているが、外国語として学ぶ者にとってこれらは非常に難しい。

この文法より語彙が重要という考えは今世紀に入って Thornbury という英語教育の専門家を中心にさらに強く主張されている。彼の著書や論文を見てみよう。

a) *Uncovering Grammar* (2001. Mcmillan Ed.)

覆いをとってよく見てみれば文法は物体ではなく、有機的な過程、処理とも言える。実際にことばを使う時のエンジンのようなもので言語の接着剤、モルタル、建物の基礎などと喻えている。そして教師の主要な役目はこの文法の本質的処置を活性化することとしている。現実には文法なしの用法もあると Coffee?—Please. / Ticket, please. / No Parkingなどの例を挙げている。そして前後関係など文脈が豊かならそれだけ文法は少なくて済むという。

b) "Big words, small grammar" ( ENGLISH TEACHING professional March 2004)

著者は 'some words are more important than others' ということに気づき、take という big word<sup>4)</sup>を取り上げて詳しく論じている。take a seat / shower / walk などただ一語の動詞というより文法的に生成された文を作る small grammar と言えるのではないかと。have, give, make などよく使われる big words も同じで語と文法の中間領域にあると。これらは使用域も広いが、中心となる意味を重要としている。どこにでも出てくる頻度の高い 200 語はテキスト全体の 50% 近くを占めると言う。

c) *Natural Grammar* (Oxford 2004)

これは画期的な本としてかなり高く評価されている。題名から見れば文法の本と思われるが、副題は The key words of English and how they work とある。つまり最も一般的、重要な 100 語（その活用形など含めて 200 語）を取り上げて、それらが型作るパターンを詳しく説明している。語を使うときはその語に特有な文法の型を選ばなくてはならないと。見開きで 1 語ずつ、左頁にその語の a) 文法的型、b) collocation 結びつき、c) set phrase など。on の例を挙げれば、a) on+NP, verb+on+NP, verb+on, b) keep on, on foot, c) on and on, what's going on? など。右頁には練習問題が出ている。つまり重要な key words は語自身がどのような型を取るかで文法の役目を果たしていることを示している。そして②に挙げた J.Sinclair の次の言葉を引用している、「Learners would do well to learn common words of the language very thoroughly, because they carry the main patterns of the language.」 学習者はその言語でよく使われる語をしっかり学ぶのがよい、なぜならこれらの語がその言語の主な型を伝えているから。

d) 'Little words, big grammar' A.Tennant (2004 on stop English)

題名は b) と反対だが little words とは語の長さが短いというだけでなく、よく使われる語と

いう本来の意味も表している。そしてこのような語は文法の役目を果たすという。ここで言う little words は極めて重要だとし、次の 3 点を挙げている。

- \* 文法はそれ自体では存在しない。文法とは語が結びついて作られる型のことで、それらを調べれば抽象的文法の規則を学ぶよりもっとその言語について学べる。
- \* 最もよく使われる 20 語は話すことばの、さらには文法の 50% を占める。
- \* これらは長さも短く音声もストレスが置かれずしばしば見落とされがちなので注意が必要。

2) 以上見てきて、特に③の Lexical Approach では語彙が文法的働きをしているということから、それでは文法はあまり重要ではないと考えられるかもしれない。英語教育の場でも近頃はコミュニケーション重視で文法は以前ほど取り上げられなくなっている。「文法を知らなければことばの意味はほとんどわからないが、単語の意味を知らなければ意味は全然わからない」とも言われている。しかし本当に文法はあまり役に立たないのだろうか。言語、特に外国語を学ぶ場合次の 2 通りの方法がある。a) コミュニケーションの場で実際に聞いて覚え、スピードリスニングなどのように真似てしゃべる、つまり体感的な学習と、b) 文法重視で、頭で英語を理解する、つまり文法というルールをもとに正確に英文を理解しまた作り出すという学習と。確かに日常的な会話とか易しいものを読むなどは a) でもすむだろう。しかしコミュニケーションでも込み入った話になればそれではむずかしい。きちんと理解して発話するには b) の学習で正確な理解、言い方を学ぶことが必要だ。生活言語だけでなく、知的活動にはどうしても文法による正確な英語を身につける必要がある。

それに上の論議はいずれもイギリス人によるもので、イギリス人が外国語としてフランス語やドイツ語など学ぶ場合は同じ系統で言語構造など共通点も多く、それほど文法を重視する必要はないかもしれない。ただ日本語と英語などヨーロッパの言語とでは構造的にも大きな違いがあり、文法は必要だ。事実学校で学んだ文法はその後実際に英語を使う場でも英語の基礎として役立っているということは多くの人々が明言している。ただ問題は文法の学び方である。用語などを規則として覚えるのではなく、text の中で実際の用法に即して学ぶことが必須である。語彙と関係づけられない文法知識は考えられない。その点語彙の担う文法という考えは大切だ。また注意すべきは、正しい文、答えは一つということを強調して完璧主義に陥らないこと。細かい間違えを恐れるなど文法への過剰な意識はマイナスになることに注意しよう。また語彙の学習が重要だとしても、単独に語の意味を覚えてあまり効果はない。語を知るということはその意味だけでなく、使い方、文の中で統語的にどう働くか、他の語との結びつきなどを知らないではならない。つまり語と文法は切っても切り離せない。

では実際にこの 2 つの関係をもう少し考えてみよう。

文法とは語を並べて文を作る決まりである。まず文には单文、重文、複文があることをしつかり身に付けておこう。

单文 主節のみ 文型 (SV, SVC, SVO, SVOO, SVOC)

文型とは文の骨組を分析した要素で考えたもの。

ここには当然自動詞／他動詞の区別、主格／目的格の区別が必要となる。

重文 主節である单文を and, but, or, so, for (というのは) などで結ぶ

複文 主節+従属節

従属節には名詞節、形容詞節、副詞節がある。

名詞節 (that) I know that the man loves her.

What he said was not true.

名詞節はひと固まりで文の目的語または主語となっている。

形容詞節 (which, that, who, when, where) The man who loves her is Tom.

副詞節 (because, as, if, when, in order to, though, like, so)

He went to the party because he wanted to see her.

簡単に言えば、文は上の单文、重文、複文のいずれかの形で現れる。それに時制（現在、過去）、相（完了、未完了）、法（話者の気持ちを表す一直接法、命令法、仮定法）がある。

語は次のように分類される。

a) Lexical words (content words) 動詞、名詞、形容詞、副詞など

b) Functional words (grammatical words) 接続詞、前置詞、代名詞、冠詞、助動詞など

a) の内容語はそれ自体高度の情報的意味を表す。b) の機能語は語自体の意味は薄いが、他の語を結び付けて文を作り上げる統語的働きを果たす。それぞれの特徴は①open か closed か、a) では新語がいくらでも入り得るし、時代の移り変わりで意味や形も変わるが b) は新しい語も入らないし形が変わることもない。つまり数も形も不变、閉じた体系である。②語数は a) は絶対的に多く、無限といえるほどだが b) はごく少数。③a) に比べ b) は広い分野で同じように使われ、数は少ないが頻度はかなり高い。④屈折、活用、派生語について意味が拡大するのは a) のみである。

ただ a) の中にも主に動詞だが b) に属するようなものもある。

動詞の be, do, have は本来それぞれ「存在、行為、所有」という意味だが、be なら存在の他に A is B のようにただ 2 者をつなげる文構成上の働きがある。また give a cry, have a belief, make a statement, take a breath などの give, have, make, take は元の意味が薄れ文法的働きが主となっているので、delexical verb<sup>5)</sup>、日本語では「軽動詞」とも呼ばれている。get も万能動詞と言われるように非常に広い働きをしている。go も「行く」の意味が薄れて become に近く、go bald / dear / blind, go hungry / naked / wild など。さらに be going to では未来を表す。このような変化は文法化<sup>6)</sup>と言われている。

文法化とは語がその固有の意味だけを表すのではなく、文構成の機能を帯びることを言う。元来 a) の内容を表す語が b) の機能的用法に変化していくこと。これは一方向性で逆は見られない。場所を表す there から there is…へと文構成の機能を果たすのは代表的例だが、上に述べたように主に一般的の意味を持つ動詞に比較的よくみられる。またこれらは一種の比喩、メタファー、メトニミー的拡張とも言える。

もう少し例を考えてみよう。

動詞が主で、前にも指摘した make, have, get などの使役用法も代表的例である。

また動詞が前置詞や接続詞の働きをするようになる例もある。

Consider → considering the price, concerning the matter (前置詞)

considering that it was a fact... (接続詞)

「よく考える」から「あることを考えに入れれば」、「…の割には」となっている。

前置詞は元来 function words に属しているが、lexical な意味から機能的意味に変わるもの

ある。

in (の中で) → (…するときには) You must be careful in crossing the street.

on (上に) → (するとすぐに) On leaving school..., On his arrival...

with (とともに) → (もし…ならば) With a mild weather, they would live longer.

上例のように前置詞では in the room から in love / trouble / in good health など元来の場所を表すことから時など抽象的概念を表すものが多い。

副詞も同じような働きがある。

aside (脇に) → (…は別にして) Aside from his problem...

apart (離れて) → (…は別にして) Apart from this point...

上例 2 つは何か新しい内容を導入する役をしている。

複合前置詞も名詞の元来の意味から変わって使われている。

in spite of    spite (悪い) → …にもかかわらず

in / with regard to                                    regard (注意, 関心) → …に関しては

on account of    account (報告, 計算) → …の理由で, ために

on top of     top (最上部) → …に加えて

3) ここでは英語の単語の中で大きな働きをする一群の語について考えてみよう。core vocabulary<sup>7)</sup>という名称が代表的だが, その他一般に basic / common / elementary / key / little / simple words などとも言われる頻度の高い一群の語である。英語は他の印欧語に比べその発展の歴史的経緯からしても文法はかなり簡易化されたが, 語彙は無限といえるほど多い。ただその中には一握りの基本的なよく使われる語群がある。20 世紀に入り国際的英語として, また英語教育のために基本的な語群を決めようという運動が始まった。Basic はその代表的なのだが, 他にも Palmer を中心に作成した Interim Report on Vocabulary List (1936), West の制限語彙 General service list (1953)<sup>8)</sup> また Quirk の nuclear English<sup>9)</sup>などがある。英語教育の面で, 特に入門期にこれらは確かに重要である。実際に数百語で人が必要なことの 80% は言えると報告されている。Carter はこれら一群の語について次のような条件を示した<sup>10)</sup>。

- ①統語的代理をする Longman の辞書 LDCE は 8 万語以上をわずか 2,000 の ‘basic and familiar words’ で定義している。そしてこれらは統語的, 意味的すべてを保持している。例えば, give には give O to O と give O O どちらの型もあるが, donate は donate it to him の形だけしか使えない。
- ②反対語がある thin は fat と対になるが, lean, slender, skinny, slim に対ではない。
- ③結びつき bright は sun / light / sky / ideas / colour / red, green / future / child とすべて結びつくが, radiant は light / smile / sun としか結びつかない。
- ④拡張 辞書項目の数が多い bright でも bright and early とか brighten up などある。
- ⑤上位語 より general な意味を表す flower は tulip, carnation などの総称だ。ただ総称的な語が必ずしもより平易でない例もある, car, bicycle, train などに対する vehicle, または table, chair などに対する furniture など。
- ⑥特別な文化的影響はない 仏語から入った語に比べ元々のケルマン系の方が多い。
- ⑦要約するのによく使われる 要約には kitty, pussy, feline などより cat を使う。

⑧連想が少ない thin に対して slender, slim はよい印象を与える。skinny (やせこけた) は悪い印象を与える。

⑨使用されている分野が広い 特定の専門分野の語ではない。

⑩文体の点で中立 fat (太った) に対して corpulent (肥満した) は形式的である。

以上論じてきた1)~3)までを Basic との係わりで見てみよう。Basic は1)では③の Lexical Approach の考えに基づいていると言える。Basic 簡略化の第一の原理は No verbs と記されている。方向など他の要素を含んでいる一般の動詞を排除して、これ以上分解不可能な意味の原子のような純粋に基本的動作だけを表すようなわざかな動詞を選んだ。選ばれたごく少数の動詞は単独だけでなく、前置詞、名詞など他の語と結びつき、また語尾をつけて文を構成している。わざかな動詞が大きく文構成に働いている。なお GDM のテキスト *English through Pictures* では文法の説明は一切ないが、文ははっきり理解し、またきちんとした文が作れるようになっている。これは言語材料が Basic であるだけでなく、状況に即した文、有機的な段階を追うなどの特質のおかげである。2)の内容語と機能語の分類も Basic words list の中の operations とその他との分類に近い。operations の語は他の語を「操作」して文を作り上げるという意味だから。Basic では動詞が operations に入っているが、operators と称されるそれら動詞は lexical の意味から比喩的に機能的意味に派生し広く使われる所以然である。3)の core vocabulary の条件はまさに Basic words にも当てはまる。Basic が考案されたのはこれらいずれも発表される数十年も前だから、いかに Ogden に先見の明があったかと改めて感心する。

次に Basic の文法について見直してみよう。別に普通英語の文法と異なるものではなく、ただそれを学びやすいように簡易化してある。Ogden は “Basic English and Grammar reform”<sup>11)</sup> の中で従来の規則を覚える文法に反対し、ことばは思考の道具だから学習者はこの道具の仕組みを意識するよう、文法がその助けになるようにと望んでいる。従来の文法批判として次の3点を挙げている、1)品詞など分類や用語の絶対視、2)ことばは文脈の中で初めて意味を持つのに文脈要素を考慮していない、3)ただ一つの正しい用法、また語には決まった意味が初めからあるという思い込み。文を構成する要素は動詞であり、文型も動詞によって異なってくる。動詞がごく少数なので一つの文型の枠組みに抑えたことは画期的であり、語の機能の違いはあっても形式としてまとめたこの型は学習初步の段階では有効である。We will give simple rules to you (now) というモデル文の型は動きを起こす人（もの）、働きや作用を表す語、動作が及ぶ対象と具体的動作を示しているので透明と言われるようになりやすい。

つまり Basic は動詞の機能の新しい取り組み、「方位」思考、ことばのフィクション理論、メタファーの応用などに焦点をおいた。文法としては上の一つにまとめた文型が主である。その他動詞の分解的用法（動詞 + 前置詞、副詞または動詞 + 名詞など）、-ed, -ing の語尾による働きの広がりなどにより、ごく少数の動詞で何でも言えるようになっている。

## 注

- 1) M. Halliday (1961) "Categories of the Theory of Grammar" *Journal WORD* 17(2) 241-29
- 2) John Sinclair (1991) *Corpus Concordance Collocation*. Oxford University Press James R. Nattinger, Jeanette S. Decarrico (1992). *Lexical Phrases and Language Teaching*. OUP

- 3) M. Lewis (1993) *The Lexical Approach*. The Language Publications
- 4) 一般的には big words とは大げさなもったいぶった言葉を、 little words は日常的な言葉を指すが、ここでは big words を大きな働きをする語として使っている。なお Zips は 1935 年に次の法則を発表した。語の長さと使用頻度は反比例している。つまり頻度の高い語は短く、 また頻度の高い語ほど数が少ないと。この 2 つ共に自然言語がいかに情報コストと深くかかわっているかを示している。よく使われる語が長くては不経済だし、 またよく使う語が多すぎても学習には不便だ。
- 5) give an attack, have a discussion などの give, have, make, take は一般には light verb, または empty verb など、 日本語でも軽動詞などと呼ばれている。lexical の意味はほとんどないので Sinclair は 1988 の本で delexical verb と称している。コーパスの分析からこの構文が非常によく使われていること、 語彙と文法の境界分野への挑戦として注目されている。
- 相沢佳子 (1999) 『英語基本 1988 動詞の豊かな世界－名詞との結合に見る意味の拡大』 開拓社
- 6) 文法化という用語そのものはあまりなじみがないかもしれないが、 例文から理解できると思う。
- 7) core vocabulary については R. Carter (1987) *Vocabulary*. London: Unwin Hyman に詳しい。
- 8) M. West は一時期 Basic に対してかなり批判をしたが、 1953 年 General service list としてコーパスを使って頻度から選んだ 2,000 語を発表した。
- 9) R. Quirk は 1981 年ホノルルの学会で読んだ論文で国際的な英語として、 また英語学習のため基礎的な nuclear English を提唱した。語彙に関しては特に制限語表は提示していないが、 他の語をパラフレーズできる、 つまりやさしい語で言い換えられるような語が望ましいとしている。統語的に簡素化を提唱している、 She goes to church every Sunday, doesn't she? などの tag question はすべて isn't that right? にまとめ、 また関係代名詞はすべて that に、 また不定詞は that 節で表すなど提唱している。
- 10) core vocabulary の条件、 test については注 6 の Carter による。
- 11) Basic の文法については Psych 16 号 (1936) に Ogden は “Basic English and Grammar Reform” という論文を書いている。



# Cross-Cultural Contextで考えるEnglishとBásic English

## —日本・元禄時代物語『忠臣蔵』(英文版)を題材として—

後 藤 寛

### まえがき

重要なポイントが密度の濃い状態ですべて詰まったCompact Englishで、小型のCapsule EnglishたるBásic English（小英語）は思想的には国際思想とも結びつき、Englishという自然言語に半人工的な手を巧みに加え、その精華を求めたものと言える。その点ではいわゆる人工言語Esperantoともやや似た、特定のculture（文化）を基本的に抜きにしたcross-cultural communication language（異文化間コミュニケーション言語）として考案された。

本稿ではcross-cultural contextという見方から、word（語）とwording（表現法）を追ってみる。これは究極的には後藤（2016, 2017）で扱った趣旨とも結びつく。すなわちBásic English等を介し、一通りのsyntax（構文法）をマスターした後に必ず直面する英語語彙の問題を、lexicology（語彙論）的に、そしてcontextual reasoning（文脈推理）から見ていくBásic Englishのmethodology（方法論）の1つとしての語釈（word interpretation）となる。

読んでよし、聴いてよしのBásic Englishによる表現法としてのwordingを日常的に追究する必要性はもちろんある。しかし、これだけでは発展性の点からも、もの足りず、すでにひと昔前のものとも言えよう。今後は「広く一般のEnglishを真に理解するため」という観点からも追究されれば、Básic Englishの有用性に対する一般的な認識も、従来のままではなくなろう。We will make Básic English great again!であり、水面上に現われるBásic Englishのみならず水面下でのそれへの注目が、結果的には英語力全体に磨きをかけるはずである。

語彙的にもBásic Englishを、本体の850 wordsだけではなく850-plus wordsとして見ていく必要がある。プラスα語への注目なしでは、たとえば全910頁の旧約・新約聖書 *The Bible in Basic English* [C.K. Ogden監修のきわめて貴重な初版本（1949年刊）が手元にあるが]などは、ただの1頁たりとも成立しない。このあたりはBásic English（BE）の拡張版としてのWider Básic English（WBE）[仮称]という見方とも結びつくと筆者は考える。

題材としてよい資料はいろいろあるが、ここでは日本で300年以上に渡り語り継がれてきた元禄時代物語『忠臣蔵』の英文版で、古くからあり版を重ねている *The 47 Ronin Story*, Allyn, J. (1970) [手元にある版は22版（1997年刊）]を用いて考えてみる。表題の頭がTheであり、Aでない点もやや興味深い。何年も前に東京港区・泉岳寺の山門前にある土産物店で購入したはずのもので、筆者の愛読書の1つである。逸話の盛り込まれた『忠臣蔵』のコンテクストは伝統的な日本人の心を理解するのにやはり有益であるし、ここでのテーマにも適するだろう。「英語で学ぶ日本、日本の心」ということになる。

「逸話」は英語でanecdoteであるが、この語は〔an (=not) + ec (=out) + dote (=to give, to be given)〕と構成要素分解でき、not given out（あまり外に出ていない）という原義的意味をもつ。『忠臣蔵』はどこまでが事実で、どこからは虚構なのか、ノンフィクションとフィクションの境界はやや不透明で創作部分も多いのも事実で小説、ドラマ、映画などの創作には打ってつけな題材となる。

今日、このきわめて日本的な逸話に関する文献等は相当数ある。大筋は一般によく知られていて、毎年恒例で12月14日には泉岳寺（東京）、赤穂（兵庫県）、山科（京都）など各地で義士祭などの行事が開催されもするが、そもそもは江戸中期の徳川家第五代將軍・徳川綱吉（天皇は東山天皇であった）の時代に、江戸城松の廊下で赤穂藩主・浅野内匠頭（あさのたくみのかみ）が起こした刃傷事件が発端となる。そして、この事件があったことは紛れもない史実である。

なお、本稿執筆にあたり、あらかじめ忠臣蔵ゆかりの日本各地を2年ほどかけ旅して回り資料集めを含めた取材もした。皇居の江戸城松の廊下跡、両国吉良邸跡、高輪泉岳寺、大石内蔵助（おおいしくらのすけ）らの切腹の場の跡（以上、東京）、赤穂城跡、大石神社、花岳寺（以上、兵庫県赤穂市）、大石神社、岩屋寺（以上、京都市山科区）、吉良上野介（きらこううすけのすけ）の菩提寺である華藏寺（愛知県西尾市吉良町）等々を回り巡った。特に吉良の首を洗った井戸もある東京・墨田区両国（本所松坂町）の吉良邸跡や、港区高輪の泉岳寺はすでにこれまで何度も訪れた場所ではあるが、改めて足を運んだ。この泉岳寺の境内にも彼の首を洗った井戸があるし、ここに記念館には赤穂義士の遺品なども陳列されている。

元来、浅野家は江戸に上屋敷と領地（東京都中央区築地）をもつていて、ここが浅野内匠頭の生誕の地でもあった。今日は石碑だけが建っている。また、内匠頭の終焉の地は陸奥国一関藩主・田村右京太夫（たむらうぎょうだいぶ）の江戸上屋敷（東京都港区新橋）で、今日ここにも大きな石碑が建っている。

その他、赤穂義士が吉良邸討ち入りの10日ほど前に最後の打ち合わせをしたと言われる由緒ある有名な富岡八幡宮（東京都江東区門前仲町）、またここに近いが、討ち入り後に吉良の首を両国から泉岳寺まで運ぶ途中に彼らが休息したと伝わる隅田川にかかる永代橋の手前数メートルの場所（東京都江東区佐賀）を石碑で確認するなど、各地のいくつかの史跡を回り巡り300余年前の元禄時代にあった一大出来事に何かと思いをはせた。

『忠臣蔵』ゆかりの地は北は北海道から南は九州まで全国にまたがっている。文献上は280カ所ほどが知られているが、特に東京（約50カ所）、京都（約30カ所）、また山陽地方では当然のことながら兵庫県（約60カ所）が多い。この3都府県で全体のちょうど半数となる。筆者の居住県である愛知県にも上記、吉良家の菩提寺の他に10カ所ほどある。

映画・ドラマでの一コマともなっているが、浅野内匠頭から特別な寵愛を受け、刃傷事件の当日に主君に随行し江戸城にも詰めていたのが家臣の片岡源五右衛門（かたおかげんごえもん）で、彼は事件当日の午後、田村邸庭先での主君の切腹直前の顔を一瞬見とどけ、涙したと言われている。片岡は『忠臣蔵』での中心人物の1人で、尾張国（尾州）出身であり墓は乾徳寺（けんとくじ）（名古屋市中区）にあったが、戦後に平和公園（名古屋市千種区）の乾徳寺墓園に移された。今日は「赤穂義士片岡源五右衛門墓」と彫られた大きな墓碑が建っていて、その横に彼の墓石もある。ここに彼の遺髪が埋葬されたと言われている。実はこの公園墓地は筆者の自宅のすぐ近くにある。

## 1. “The 47 Ronin Story” (John Allyn, 1970) 『忠臣蔵』より — 語義と語法

元禄14年（1701年）3月14日、刃傷事件が江戸城内で起こった。天皇勅命による京都からの勅使の接待役の1人となっていた播磨国（播州、現兵庫県）の赤穂藩主・浅野内匠頭長矩

(あさのたくみのかみながのり) が、徳川家ともつながりのある名門家の出で、幕府の典礼関係の役職にありその接待での指揮役となっていた吉良上野介義央 (きらこううづけのすけよしなか) を切りつけた。儀礼上の問題から、長矩は若者の田舎侍だと上野介から思われ、見下され、侮辱されたことが原因であった。長矩は即日に切腹となり、赤穂城を明け渡すこととなり、領地は没収され、城主を失った赤穂藩士は浪人 (ronin) となった。当時の慣習法としての喧嘩両成敗とはならず、上野介はとがめなしであった (もっとも彼はその後、江戸城近くの邸宅から両国本所に転居することとなるなど、幕府から制裁は受けたと解釈すべきで、この点は後でも触れる)。

侍 (samurai) としての面子 (めんつ) から、そして主君の無念を晴らすため、2年近く後になる元禄15年 (1702年) 12月14日未明、長矩の家臣で家老の大石内蔵助良雄 (おおいしくらのすけよしたか) が忠誠を誓う同志とともに両国の吉良邸に討ち入り、切り落とした吉良の首を泉岳寺の主君の墓前に供えた。討ち入りに参加した47義士は罪人となることはもちろん当初から覚悟はしてのことであった。武士階級の彼らは当時の慣習として一時的に大名邸お預けとなつたが、結果的に幕府の命 (めい) は全員の切腹であった。47人の切腹とはまさに驚きである。

実はこの義士の数47に関しては曖昧な点もあり、1人は切腹したのが何年も後 (40数年後) であった。寺坂吉右衛門 (てらさかきちえもん) という足軽 (身分の低い武士) が、討ち入り直前に逃亡したという説があるし、一方で彼は討ち入り直後に大石内蔵助から吉良邸を立ち去るよう命じられたとも言われている。理由はこの仇討ちを後世に伝える生き証人となるためだったというのである。彼が47浪士のうちでは地位は最も低かった。このあたりは不透明で彼は逃亡者だったのか、密使だったのかは今日なお議論もされている。彼をテーマにした小説に『最後の忠臣蔵』がある。討ち入り時には年齢は30代であったが長寿を保った後、最終的には80代で切腹した。今日、東京・高輪の泉岳寺、また兵庫県・赤穂城跡地にある大石神社にも彼を含め47墓石が建っている。

大石神社は京都の山科にもある。森の中の静かな場所で、彼の遺髪が埋葬された墓石もある。内蔵助はこの近くの岩屋寺に隠れ、討ち入りの秘策を練っていた。ただ一方で彼は、気晴らしを含め遊郭にも通っていたことはよく知られている。

興味深い点は、泉岳寺などの墓石に彫られた46士の戒名 (法名) にはすべて象徴的な「刃」と「剣」の2文字が銘記されているが、寺坂吉右衛門のものにはこれがない。家老大石内蔵助のものは院号付きで「忠誠院刃空淨剣居士」、また、討ち入り計画には彼とは違い急進派で、当初から強弁していたと言われる堀部安兵衛のものでいえば「刃雲輝剣信士」であるが、寺坂吉右衛門のそれは「刃」「剣」の文字なしで「遂道退身信士」である。「遂道退身」という戒名にも興味を抱かせる。いずれにせよ、『忠臣蔵』の赤穂浪士は討ち入りで全員が生き残ったことは驚きであるが、人数が47人だったのか、それとも実際には46人だったのか? やや曖昧である。(46+1)人とか、(47-1)人というような言い方・書き方もできることになろう。

一連のこの出来事がその後、半世紀ほどして竹田出雲ら3人の合作による『仮名手本忠臣蔵』として浄瑠璃・歌舞伎などでの名作となり、広く扱われてきたのである。日本人は今まで300年以上この元禄時代の事件をくり返し話され (talking)、聴かされ (hearing)、書かされ (writing)、読まされ (reading) てきたわけで、こういう日本の時代物は他にはない。そし

てこれは日本という国と文化が存在する限り、今後も永久にくり返されることとなろう。

「将軍」、「徳川幕府」、「赤穂藩家老」、「赤穂47義士」、「切腹」、「戒名」、「淨瑠璃」、「歌舞伎」などを英語に変換する場合、相当する適当な word / wording さえ次々とひらめければ、あとは単に構文力の問題となり特に難しくもなくなる。英語の構文力の基本は入門期で修得できるが、語の意味 (sense) や語法 (use) に関してはその後も英語に関わっていく限りは追い求めていくこととなる。これらの日本語をそれぞれ順に、shogun, the Tokugawa Shogunate, chief retainer, 47 loyal retainers of Ako, seppuku, posthumous name, joruri puppet play, kabuki play と言うと、いくつも日本語を用いることとなる。puppet [pup (p) (=form of a person) + et (=small)] は、代わりに marionette [marion (<Mary) + ette (=small)] もよかろう。

日本文化を英語で伝えるとなると、事実上このように日本語まじりの英語となるのは当然で、一般的でもあると同時に、そのほうが微妙なニュアンスを含むことになり適当となる。今日、ronin, samurai をはじめ shogun, Shogunate, seppuku, samurai, joruri, kabuki など、すべて英語ともなり辞書に掲載もされている。seppuku は、harakiri としても英語となっている。これは cross-culturally (超文化的) には ritual suicide と言うことになるが、さらに説明はいる。また、samurai は warriors ということになる。英語の posthumous name、日本語の「戒名」は概念そのものが仏教的である。

「語」の視点から後藤 (2016, 2017) で扱ったテーマとつながるが、仮に自分の英語の lexicon (レキシコン・語彙目録) には English ではなく Básic Énglish しかないと想定すれば、上の shogun は the military ruler of Japan でよい。また、the Tokugawa Shogunate は the Tokugawa government, chief retainer は No. 2 man of Asano's House in Ako, posthumous name は name after one's death, さらに、the 47 loyal retainers of Ako は the 47 samurai of Ako who were true to their head (head「主君」はプラス a Basic 語を用いれば master でもよいし、*lord* でもよい)、そして joruri puppet play は単に joruri play でとりあえずはよい。

ronin は military men without their master とか、samurai-turned commoners とも言えよう。

また、仮に「彼らは江戸幕府から切腹を命じられた赤穂の浪人であった」を seppuku という語を用いず Básic Énglish で言うなら、They were one-time military men in Ako who were ordered by the Edo government to put themselves to death by cutting the stomach with a blade. などによかろう。語彙制限の下ならこのようなものになる。English で言えない場合、よりどころとなる秘密兵器・伝家の宝刀としての英語が、Compact / Capsule English としての Básic Énglish もある。最後の文中での stomach は「腹」の意味となる。何もおかしくはない。

ここで Allyn, J. (1970) のまずは冒頭 Preface (序文) での1節を引き合いに出し、語義と語法の観点から一般の English 文の語釈を試みる〔下線・破線は筆者、以下同様〕。

- 1) It happened in 1701 in Edo. In a moment of anger and frustration, Lord Asano of Ako lashed out at a corrupt court official and set in motion a chain of events that terminated in one of the bloodiest vendettas in Japan's feudal history. These events shocked the country and brought the Shogun himself to a legal and moral impasse. When it was all over, Japan had a new set of heroes – the forty-seven ronin, or ex-samurai, of Ako.

The historical facts of their deed are plain; the details are hazy. Celebrated in song,

story, drama, and motion pictures many widely different versions have been produced.

まさにこれが『忠臣蔵』の発端となった江戸城での出来事と社会に及ぼした影響についてであり、上で触れたことの確認ともなる文である。最初の破線部にもあるとおり、徳川將軍・綱吉自身もこの事件には大変悩んだようである。ここでは語としては下線で示した lashed, corrupt, vendettas, feudal, legal, impasse, hazy などが英語の入門期以降に、学習者にとっては未知の語として辞書を必要とする語でもあろう。

入門期の検定本で英語の構文法の基本はマスターできるはずであるが、検定本は Básic English ではなく English であり両者での語彙には当然、ギャップがある。いわゆる English に習熟するためには語彙力が問題となる。これが必ずぶつかる壁であるが、実は未知の語も Básic English 語彙をよりどころとすれば、類推 (analogical inference) と文脈推理 (contextual reasoning) で意味は大抵は理解できる。後藤 (2016, 2017) ではこのあたりの対処法を扱い、慣れではほぼ 100% (少なく見積もっても 80% 以上) は理解できることを立証したつもりであるが、ここでも同じ線に沿いさらに考えていく。English としての構文法は解かるが、語に関しては Básic English 語以外はすべて未知だと想定もして考えていくということである。

文中下線部の lashed から順次見ていく。後ろに spatial particle (空間不変化詞) の out at がある。ここに目をつければ意味は必ず「何かに向かって、それがぶつかること」のはずである。文脈からは怒った浅野内匠頭の吉良上野介への行為である。同時にこの lash という語の音素 /læʃ/ であるが、元来は echoic word / imitative (擬音語) と考えられている。英語の lexicon (レキシコン) には、驚くほど多くの擬音語が組み込まれていることが見落とされてはならない [たとえば Basic 語 laugh なども擬音語だとするのがほぼ定説であることも後藤 (2017) で確認しておいた]。lash は「打つこと」を意味する。慣れると /læʃ/ という音そのものから、意味が直感的に推測できるようになる。これがまさに音感であり語感ということになろう。

次の corrupt は Basic 語彙本体の 850 語中の語ではないが、これは後藤 (2017) でも引き合いに出したプラス a Basic 語の *eruption* (火山などの爆発) と *paronym* (同系語) の関係にある。音素 /rʌpt/ が、意味の核を類推するよりどころとなる。un-Basic の *bankrupt* (破産), *interruption* (妨害), *rupture* (破裂) なども同系語である [以下、引き合いに出す Basic 語は初出の場合だけ太字体、プラス a Basic 語は常に標準体のイタリック体、その他の一般語としての un-Basic (非 Basic) 語は標準体とし区分けする]。corrupt は入門期の検定本や Básic English で培った構文力からは、この場合は形容詞であることは分かるはずで「腐敗した、鼻持ちならない」のような意味だと推測できてくる。負 (-) のイメージ語である。そもそもこういう語の /rʌpt/ という音からも「激しさ」の意味も慣れてくると直感されてくる。

vendetta は one of the bloodiest vendettas とあり Basic 語 *blood*とともに文脈推理できる。bloodiest (< bloody 「血なまぐさい」 < blood) から vendetta は当然、何かの「争いごと」となる。まさに『忠臣蔵』でのキーワードの 1 つである。vendetta は *revenge*, *avenge*, *vengeance* などとも同系なのであるが、これに関する次節で改めて確認する。

feudal も文脈推理で理解できよう。feudal の *feud-* は元来は「土地、領土」の意味だが、これの PIE (Proto-Indo-European) [印欧祖語] の推定 etymon (語根音形) は /PEIG-/ とされ [文字のなかった PIE であり表記法はいろいろあるが、以下ここではその etymon は筆者風にすべて大文字書きとともに、音素的にもこのような表記法とする], 子音の音推移に関する

Grimm's Law (グリムの法則) に従った /p/ → /f/ となった。これは実は Basic 語の *paint*, *picture* とも同系である。原義は「切って分割すること」で、この文脈からは士農工商という身分上の分割の意味である。そうであれば *feudal* は「封建社会の」の意味だと推理できる。語頭の子音を交替させ推理するのであるが、ここでの 1 つの手法となる。慣れで克服できる難しさである。一般的の辞書では把握できない PIE の語根音形から、英語の同系語をみる手法に関しては後藤 (2016) で詳細に扱ったし、同 (2017) でも示唆した。

a legal and moral impasse の *legal* は、既知の Basic 語をあてがい音形からの語根照合で考えれば *law* が見えてくる〔「語根音形照合」は筆者の命名で、後藤 (2017) では英語で etymon collation (EC) としておいた〕。*law* の PIE は /LEGH-/ と推定されていて、*legal* は同系語である。*impasse* は文字からも見当がつくラテン系で、[im (=not) + passe (=past)] と Basic 語で構成要素分解できる。「通り過ぎることができないこと」であり、やはり負 (-) のイメージ語で「困ったこと、トラブル」の意味と定まってくる。

最後の hazy はその前に *plain* (<*plane*, etc. </PELə-/) 「明白である」とあり、セミコロン (;) であるので左右の文が対比・対照 (contrast) だと文脈的にも推測できる。そうであれば *hazy* は「不透明である」こととなる。これで上の 1) の文の意味はすべて解けたことになる。付け加えておくが *plain* は「平たいこと」が原義で、Básic Énglish では「平野・平原」の意味ではプラス a Basic 語となるが、「明白な」の意味では un-Basic 語となる。

なお、二番目の破線部で *song*, *story*, *drama* の 3 語は s の付かない不可算名詞で用いられ、*motion pictures* だけが s の付く可算名詞である点にも注目しておきたい。ここでは *song*, *story*, *drama* が抽象化された意味となっていて、3 つでセットの literature (文学) のように考えればよかろう。要するに *song*, *story*, *drama*, and *motion pictures* 全体で the arts (文芸) の意味と解すればよい。ここでは *drama* (劇上演) だけが un-Basic 語であるが、代わりに Basic 語なら *play*, プラス a Basic 語なら *theater* ということになる。

最初の破線部で言及されている將軍・綱吉 (1646–1709) であるが、この將軍は極端に犬を愛護したので犬公方 (いぬくぼう) と言われた。今年 (2018 年) は戌年 (the Year of the Dog) であるが、実は彼の生まれた年 (1646 年) の干支 (えと) は戌であったらしい。「生類 (しょうるい) 懈 (あわ) れみの令」を発布し、生き物、それも特に犬を殺すと厳罰としたことで知られている。彼は現在の東京・中野駅周辺一帯に東京ドーム 20 倍ほどの巨大な犬の保護施設も造ったようで、今日はそれに因み中野区役所前に犬の銅像がいくつも設置されている。次にこの法令に関わる 1 節を引用する〔頁番号は省略で以下同様、中略は筆者〕。

- 2) Sometimes one had to kill to defend oneself against an enemy, or in the case of animals, to get food. ... But the Shogun's new Life Preservation Laws went much too far. Animals were now apparently more privileged than humans and this topsy-turvy manner of thinking had brought the whole country to the brink of economic chaos.

これはまだ主君の刃傷事件の前の話で、家老 (chief retainer) であった大石内蔵助が、將軍・綱吉の発布した生き物殺傷の禁止法令を憂えている内容である。この法令のため民衆からはかなり反発が高まっていて、国の経済まで混乱を招いていたと書かれている。食生活では魚介類も食べられなく、精進料理だけのようになってしまう。「生類憐れみの令」といういかにも日本的な趣のある日本語を Allyn, J. (1970) は the Life Preservation Laws としたが、納得で

きる。Básic Énglish なら the Laws of Support for Animals などでよかろう。生き物を殺すことを厳禁する法令を発布した將軍から、皮肉にも浅野内匠頭は即日の切腹を命じられた。

上の 2) の文中での「語」を 1 つだけ扱っておく。破線部中に topsy-turvy とあるが、どういう意味か？ 未知であっても文脈からも負（-）のイメージ語と推理もできる。既知の Basic 語を topsy-turvy にあてがって語根照合で考えれば top と turn が見えてくる。「top が turn すること→逆さまになった状態の、混乱した状態の」の意味だと解ける。慣用的な語で、自然でもあり、味もある。文中の未知の語も Básic Énglish で鍛えた構文力があれば、やはり後藤（2016, 2017）で提示した語彙論的手法で大抵はその語義を解き明かすことが可能となる。

上の 1), 2) は English 文でありその理解法となるが、表現法の視点から言えば Básic Énglish に慣れると、場合にもよるが一般的には特に事柄の主旨・概要を伝えるのが English より簡単になるはずで、その理由は語彙制限のゆえ用いる語の目的が初めから定まっていること、語法上の複雑さの度合いも低いからである。一般的な English は語義と語法の問題が縦横に織りなす。両者とも「語に始まり、語に終わる」と思えるが、仕上げとしては語をすべて洗い直す必要がある。「点」を正しく結びつけ「線」とするには、まずは正しい点を定める必要があり、点としての word (語) が明確になれば、線としての wording (文言) は相応に容易となる。

## 2. Lexicology (語彙論) の視点からみる語訳 — 文から「語」へ

英語の仕上げとして「語」をすべて洗い直していく必要性を示唆したが、本節では既知の語（既知だと思っている語）も未知の語も、すべてルーツとしての原音と原義を追い求めることがの重要性を改めてさらに確認したい。語の意味は後藤（2016）の「索引」の活用次第で、まるですべて理解できるはずであるが、以下それなりにここでも構文法は分かるが、語に関しては Basic 語以外はすべて未知だと想定もして *The 47 Ronin Story*, Allyn, J. (1970) で考えていく〔文中の破線による中略は筆者、以下同様〕。

- 1) “I have here a petition to the Shogun’s representatives requesting leniency for the survivors of the Asano clan—that they be allowed to keep their land and other possessions because of their long and illustrious history of service to the Shogun and his ancestors before him. It is merely a polite request for the restitution on behalf of Lady Asano and Daigaku Asano ….”

大石内蔵助が他の藩士に伝えている内容である。文中の特に破線部がポイントとなるが〔以下、同様〕、語としては petition, leniency, illustrious, restitution に注目しておきたい。

文中最初の下線語 petition は音声的に第二音節の -ti- に強勢アクセントがかかるることは簡単に分かる。ここに意味の核もある。音そのものを示す PIE (Proto-Indo-European) [印欧祖語] の etymon (語根音形) は根っからの意味を伝えるので、まさに原音と原義を一体化することができる。これは Basic 語 competition と同系で、PIE の /PET-/ に由来し、原義は「飛びつき求めるここと」である。un-Basic 語 repeat (繰り返し) などとも同系である。文中の後ろに requesting ともあるので、このコンテキストでは願い出る「嘆願書、請願書」の意味となろうと文脈推理 (contextual reasoning) できてくる。

次の leniency は強勢のかかる音節が第一音節の leni- /lɪ:nɪ-/ であるはずと分かる。これもこ

こに意味的な核がある。少しレベルは高くなるが実は Basic 語の let (放つこと・許すこと) と同系で、ここから類推すればよい。ここでは「寛大さ、寛容」の意味だと解ける。

さらに次の illustrious は強勢のある音節が第二音節の-lustri-であることは明らかで、Basic 語 light と同系の語である。PIE etymon は /LEUK-/ (/LUM-/) として復元されていて、原義 (root sense) は「明るいこと、明るくすること、輝くこと」である。

最後の下線語 restitution は、強勢アクセントのある音節との関係にはズレが生じるが、-sti- の部分が PIE etymon で /STER-/ (/STRU-) とされている。語根音形照合で既知の Basic 語をあてがって類推すれば structure などとも同系であることが見てこよう。restitution は [re (=again) + stitution (=structure)] で、「回復、建て直し」の意味となる。

他に un-Basic 語もいくつかあるが、ここではすべては扱えない。もうコンテキストの推理から全体の意味は理解できることになろう。家臣として大石内蔵助は浅野家の復興のため内匠頭の妻と、彼の弟である浅野大学長広（あさのだいがくながひろ）に代わって嘆願書を幕府に出すという内容である。次の 1 節を見てみる〔文中 2 行目の中略は原文どおり〕。

- 2) "... we have but two alternatives: either to kneel before the castle and commit seppuku as a final protest, or to surrender the castle peaceably ... and then split up and wait until the right moment to take revenge on Kira himself!"

上の 1) の内容とつながるよう以下、適宜、引用部分を提示するが、ここでは大石内蔵助が嘆願書が幕府に受け入れられるか否かのどちらかだと言っている。受け入れられなければ自分たちは抗議として赤穂城の前で切腹か、あるいは城を明け渡し吉良上野介に対し仇討ち・報復をするかのいずれかだと述べている。

語として revenge を下線としたが、前節の 1) の例文で vendetta とともに触れたように、vendetta, revenge, avenge, vengeance はすべて同系語である。この PIE etymon は実は /DEIK-/ で、「指・口で指示すること、立証すること」が原義である。日本語文字で「仇討ち」の「討」という漢字の偏は「言」であるが、やはり「口」の意味を伝えている。これらは Basic 語ではラテン系の adjustment, judge [<ju (=right) + dge (=to say)], また condition とも同系であるし、さらにゲルマン系の teaching とも実は同系である。/v/ の音素をもつ un-Basic 語の同系語にはラテン系の verdict (評決・答申) などがある。

なお、revenge (re- = back) と avenge (a- = to) は少し違いがある。厳密には revenge は被害者が自分でありその恨みを晴らすこと、avenger は被害者が他人でその恨みを晴らす意味である。語法としては revenge は動詞より名詞で用いることが圧倒的に多い。

- 3) As the men gathered eagerly around, Oishi noticed that one boy among them appeared to be barely in his teens, and he stopped him to question him about his age. The boy swore he was sixteen, however, and his manner was so stalwart that Oishi did not have the heart to challenge him further.

家老としての大石内蔵助が家臣と何かと対応策を練っている会合で、10 代らしき少年が1人いることに気づき驚いて年齢を聞くと、16 歳だと答えたが、その態度からもう何も聞かなかつたという場面である。ここでは stalwart, challenge の 2 語を下線とした。

stalwart が未知な語であっても、これも解ける。強勢アクセントのある音節が第一音節の stal- のはずだとは見当がつこう。やはりまたそこに意味の核がある。PIE etymon は /STA-/

(/STĀ-/ )とされ、原義は「立って動かないこと」である。Basic 語には stem, still, star などいくつも同系語がある。この PIE の語根音形からは今日多くの語が英語となっている。stalwart は「断固とした、勇敢な、不屈の」のような意味となることが見えてくる。

二番目の下線語 challenge は語法面から注目しておいてよい。「身分などを確認で問いただすこと」の意味で用いることがある。何かの検問所などでの言い方としても用いられる。PIE etymon は /KEL-/ として知られ、やはり多くの英語が誕生したが、Basic 語では clean, clear など、また un-Basic の claim も根元ではつながっているかもしれない。

なお、47 (46) 義士の年齢に関しては、10 代が 2 人いて、もう一人は内蔵助の息子の主税(ちから)で、計算したところ義士の平均年齢は 38.7 歳であった(内蔵助は当時 44 歳)。

- 4) There was a general murmur of approval, led by Hara, and the overjoyed Mimura was allowed to sign. His was the sixty-second signature and with it Oishi's band of vengeance was formed.

さらに会議での内幕である。討ち入りの賛否をめぐっては、もめたようである。原惣右衛門(はらそうえもん)や三村次郎左衛門(みむらじろざえもん)に関して述べられていて、討ち入り賛成の義士の数は(初めは 300 人ほどでもあったようであるが)徐々に減り三村の署名が 62 番目となり、これで大石の下での仲間が組織されたと記されている。62 名はもちろんこの段階でのことで、最終的には 47 名となったわけである。文中の vengeance は上の 2)と前節 1)のそれぞれ解説中で引き合いに出しておいた。

下線語 murmur は擬音語である。英語に擬音語が多く、これが見落とされてはならないことは前節の例ですでに言った。擬音語と見抜けば簡単で、「ぶつぶつ言う声」の意味である。この murmur と関連し、un-Basic 語 rumor (うわさ) も実は擬音語で同系である。

- 5) ... Oishi proposed that the bulk of what was left be put aside for "the restoration of the house of Asano." ... what was left was then divided among the men according to rank and length of service. The amounts they received were not large and all realized that they were facing severe economic hardship if not outright destitution.

ここでは restoration, destitution に下線を施した。二つ目の destitution が難しい語と思われるかもしれないが、これも解ける。内容は浅野家の今後の問題についてで、資金の分配に関して内蔵助の提案が述べられている。分配金が少なく、彼らは経済的に緊迫状態であった。ここには書かれてはいないが、分配金を受け取った赤穂侍たちは浪人としてそれぞれ各地へ離散していった。

最初の下線語 restoration は上の 3)で見た stalwart の音節中の語頭子音 -st- /st/ に注目すれば、ルーツは同じと見定めがつく。restoration は Basic 語で考えれば store などとも同系であり「立つこと、建つこと」が原義で、この場合「浅野家の再建」のこととなる。

文末の下線語 destitution は上の 1)で見た restitution と同系列なことは明らかである。destitution は [de (=down) + stitution (=structure)] と考え推理すればよい。前の部分での「経済的厳しさ」からも推理できる。if not outright destitution とあるので、「まったくの down の状態ではないにしても→まったく困窮状態ではないにしても」と解ける。さらに次の文で考えてみる。

- 6) The second message was from Horibe, the acting leader of the Edo group, and it was a

demand for prompt action against Kira. ... Horibe, an impetuous young man, must be made to understand that they had to wait for results on the petition.

この文の少し前でのコンテキストを説明すると、内蔵助は赤穂から京都の山科に居住地を移し、ひっそりと隠れていた。ある日、江戸の荒木十左衛門という幕府の目付け役（今風には監査官）からの通達が来た。その中身は將軍・綱吉の率いる評議会では内蔵助の嘆願書は望みは薄いというものだった。そしてもう一つの知らせが江戸にいて指揮をとる下臣で仲間の堀部安兵衛から来て、その内容は討ち入り態勢をとるべきだというものだった。しかし内蔵助は慎重で、嘆願書の最終結果を待つべきだと考えていたのである。

ここには書かれてはいないが当時、吉良の邸宅は監視の厳しい江戸城に近い呉服橋（千代田区の現東京駅八重洲北口周辺）にあった（その後から幕末までここには北町奉行所があり、今日は史跡となっている）。呉服橋から離れた場所となる両国の本所松阪に彼が移転するという情報が入り、討ち入りのしやすい状況にもなった。

下線語 impetuous はどういう意味か？ やはりこれも類推で解ける。強勢アクセントは第二音節 -pet- にあることは明白である。これは上の 1) で見た PIE etymon が /PET-/ の petition, Basic 語では competition と同系なのである。原義が「飛びつき求めること」であった。そうであれば impetuous は「気性の激しい、衝動的な」のような意味であると断定できる。これは [im (=in) + petuous (=to go)] と要素分解できる。そこで次である。

- 7) “... as far as our petition is concerned, all is lost. Daigaku Asano has been placed in the custody of Asano-Akinokami in his province. He has been condemned to permanent exile for the brother's crime and the family name is to be excised from the official book of heraldry. All hopes for the recovery of the castle at Ako are dashed once and for all.”

浅野内匠頭の弟の浅野大学長広を城主とし、赤穂城の復興を願った内蔵助の嘆願書であったが、結局は幕府に受け入れられなかった。大学は兄の起こした事件により広島の浅野宗家に幽閉となり、安芸国広島藩主・浅野安芸守綱長（あさのあきのかみつななが）のもとに永久留置となってしまった。赤穂城復興の希望は完全に途絶え、結果は吉良邸への討ち入り動議の採択〔於・安養寺（京都・円山）、時・元禄 15 年（1702 年）7 月 28 日〕となったわけである。内蔵助は討ち入り後に家族に降りかかる運命も考慮し、長男の主税（ちから）以外の妻子とも離別し関係を絶った。大変ドラマチックである。語として condemned, excised, dashed を見てみる。

condemned は次に空間詞の to がある。必ず「～に向けられること」の意味だと推測できる。condemn（とがめる・非難する）は Basic 語 damage と同系で、負（-）のイメージ語である。condemn は un-Basic 語の damn（のろい・ののしり）、demon（悪魔）などとも同系である。

excised の excise は音的には第二音節の -cise に強勢がかかるることは分かる。やはりここに主たる意味は隠れていることになる。Basic 語の scissors（ハサミ）からの類推でいい。こういうことは慣れで直感できるようになる。まさに語感とはそういうことで、-cise の音素 /sáiz/ は scissors の sciss- /síz/ と対応することなどの感覚（センス）である。母音の変異は流動的で一般には意味の相違はもたらさない。PIE etymon は /SKER-/ とされ、原義は「切ること」である。したがってこの場合は「削除される、抹殺される」の意味となる。

dashed の dash は「ダッシュ記号（—）」の意味でも用いられるが、これまた実は擬音語という説がある。この説からすれば簡単に解けることになる。ここでの、希望などが dash され

るとは、希望が「なくなること」である。なお、dash はゲルマン系であるが、これに対してギリシャ系の hyphen (ハイフン) は [hyph (=under) + (h) en (=one)] で、「1つの支配下にあること、なること」の意味である。最後に次の文を扱ってみる。

- 8) As he poised the dirk for the last swift thrust he thanked the gods of heaven and earth for the chance he had had to prove himself as a samurai. In the end this was all that mattered, for a man will only be as long as his life but his name will be for all time.

これは巻末締めくくりに近い下りの文で、討ち入り後に主君の眠る泉岳寺に近い細川邸お預けになっていた大石内蔵助の切腹に関わる内容である。寺坂吉右衛門を除いた46士は4つの大名屋敷の熊本藩細川邸(17名)、長府藩毛利邸(10名)、松山藩松平邸(10名)、岡崎藩水野邸(9名)に分けて預けられた(この4つの大名邸跡もすべて実際に確認したが、いずれも港区にあり今日は史跡となっている。松平邸は現在はイタリア大使館となっていて中には入れないが、裏手に石碑がある)。幕府に自分たちの身を委ねた(They put themselves to the Shogun's authority.)わけであるが、この4つの大名屋敷で全員が同じ日の切腹となった。時は元禄16年2月4日(1703年3月20日)であった。

下線語 dirk の前の the は所有格の his で考えればよく、「刀」の意味は文脈推理できる。冠詞 a (an), the は特殊な場合以外はどれも弱音となり英語の場合は難しさもあるが、その点ではたとえばスペイン語では定冠詞 el, la, los, las は弱音であるが、不定冠詞 un (unos), una (unas) は常に強音で音声的にも容易に意味区分できる。dirk の由来はあまり明確ではないが、どうやら中世時代にイングランドのテムズ川支流にあった処刑場での処刑執行人の名 Dirk かららしい。Allyn, J. はあえてこの語を用いたと考えられる。最初の破線部では内蔵助がみずから刀を振りかざしたとき、自分が侍であることを立証する機会を与えられ神に感謝した、と書かれている。

二番目の破線部で「人間は生きている限りだけ存在するが、名前は永久に存在する」と書いていて興味深い。swift, gods, matter の3語を下線とした [god はプラス  $\alpha$  Basic 語]。

swift は Basic 語の swim, un-Basic 語では sweep などと同系(PIE etymon は/SUEI-/)

god は s 付きで gods of heaven and earth (天地の神々) としている [god とともに heaven もプラス  $\alpha$  Basic 語, earth は Basic 語]。ユダヤ・キリスト教的には天地創造の神は唯一絶対神 Yahweh / Jehovah (ヤハウェ／エホバ) であり, gods ではなく god であるが、江戸幕府はキリスト教を禁じていた。ここでの s は重要で、gods は日本神道 (Shinto) でのいわゆる八百万 (やおよろず) の神々と解釈できる。ついでながら、キリスト教的な神の家 (House of God) である Basic 語 church には Christ (キリスト) の名が隠れている。house も同系語の関係にある。

matter は PIE etymon の /MA-/ に由来し、Basic 語の mother, material, さらに形容詞としてのプラス  $\alpha$  Basic 語 mature (成熟した) などとも同系で、「育てる母」が原義である。material は「材料、母材」である。un-Basic 語 matter は「母体となるもの→重要なもの」で、ここでは動詞で「重要な問題となる」の意味で用いられている。この語の語法もまさに重要である。さらに un-Basic 語 matrix (母型・マトリックス) なども同系である。

以上、見てきたが『忠臣蔵』の発端が江戸城での礼儀作法 (etiquette) で、それがもとで刃傷という攻撃 (attack) ともなったとすると、語源的にも奇妙につながる。etiquette (エチ

ケット), そして刀という stick (棒・杭), それでの attack (攻撃) の 3 語は PIE etymon が /STEIK-/ (/STEIG-) とされ, いずれも同系である。etiquette は元来が規定を書いて杭に貼り付けた札 (ticket) のこと, attack は [at (= to) + tack (= stick)] で棒・杭に張り付けることである。un-Basic 語の etiquette, Basic 語の attack, stick, ticket は原義からは同一語群に入る。音声的にも似た響きが感じられる。これが音感と語感ということになる。さらに un-Basic 語の steak (肉) もこの語群に入る。棒に刺して食用にするものが steak であった。そもそも「棒, 杭」を意味する un-Basic 語に stake があるが, これも同一語群となる。

江戸城での刃傷事件は, 本来は喧嘩両成敗であったはずだろう (The two of them — not only Asano but Kira as well — would have been responsible for what took place in Shogun's House in Edo.) が, 吉良上野介はとがめなしであった (Kira got away with it.). 『忠臣蔵』はわれわれに 1 つの教訓も与える。浅野内匠頭は若くても (当時 34 歳), そして地方ではあっても播州 (播磨国) [現兵庫県西南部] の赤穂藩主という一国一城の主でプライドも高かったらしい。

一方, 吉良は名門足利家の血統であり, 幕府の高家で, 年輩 (当時 61 歳) であった。その手前からも浅野が相応な貢ぎ物とともに, 中央の江戸と江戸城でのしきたり・マナー, 朝廷からの使者を迎えるまでの礼儀・礼節 (etiquette / propriety) にもっと気配りをし, 付度 (そんたく) していれば問題はなかったのであろう。格言の「郷に入 (い) っては郷に従え」 (When in Edo, do as the Edo samurai do.) ということになる。赤穂城主というプライドとともに, 浅野は短気な面もあったように思える。封建社会のなか, 内心では自分のほうが格下とも特には思っていないかったかもしれない。いずれにせよ, 暴力も言葉 (words) の一部で, それを補足するものと言える。

吉良にはとがめなしであったと言ったが, 実は討ち入りでの彼の死後, 後継ぎで養子の義周 (よしちか) が討ち入り時に邸内にいたにもかかわらず, 公邸としての吉良邸を防備できなかつたとして, 幕府から責任を問われた。そしてその後になるが, 義周は赤穂浪士の切腹と同じ日に領地没収とともに信州諏訪家の高島城へ幽閉となった。これが吉良家に対する制裁・罰となつたと同時に, 『忠臣蔵』の幕引きとなる。義周は精神的にかなり悩みもし, 3 年ほど後に病死した。今日, 諏訪大社の隣にある法華寺に彼を祀った墓石が建っている。

人には特定の人を好いたり, 嫌ったりする習性があるが, 人を侮辱し見下してその人から見上げられることはない。鎌倉時代の兼好法師は『徒然草』(第 38 段) で, 人から恥をかかされたり, 侮辱されたりなどしても, 何ら気にかける必要はない旨を説いているが, その理由として人間は所詮は誰もすぐにこの世には存在しなくなる運命にあるからだと言う。痛烈であるが, そうであれば刀で他人を自分より多少だけ早く存在しなくする必要もなかろう。やはり泥仕合の喧嘩は, 両成敗が合理的に思える。兼好法師の言葉は Básic English なら Whatever it is, do not be troubled by what others say about you, for anyone has to go some day or other. などと言えようが, 仏教的な諸行無常でもあり, 文化的には日本風の響きともなる。

本稿では文を語の視点から見る語釈をしてきたが, 実は同時に各段落の内容を English / Básic English ではどのように言い表すかも, それなりに意識もしてきた。前節末尾でも言つたが, 特に事柄の趣旨を概略的に伝えるには, 語が無限に広がるのではない Básic English のほうが English よりもはるかに容易である。Basic 語が常に溢れ出る状態になっていればよい。「大石らの吉良に対する主君の仇討ち」の主旨内容も, Básic English 850 個の駒の布石で一口

で言うとすると On the 14th day of the 12th month of the 15th year of Genroku (January 30, 1703) Ohishi Kuranosuke and other 46 samurai in Ako put Kira Kohzukenosuke through for what had been done to their head, Asano Takuminokami.などよい。head はプラス a Basic 語を用いれば *master* や *lord* でよいと前節で言った。

いずれにせよ、語彙論的視点からの word 「語」への注目には必ず発見がある。今後は語源辞典もこれまでのものから一歩進み、印欧祖語 PIE の etymon (推定語根音形) からその paronym (同系語) を一括提示するようなものの編纂が望まれる。それも C.K. Ogden 選定の Basic 語など、ある種の基本となる上位概念語が軸語／基語 (pivot word / base word) として据え付けられるとよい。synonym (類義語) を一括提示する辞典に thesaurus (類義語辞典) があるが、それとはまた別な「同源語辞典」(paronymic dictionary) なるものの編纂である。

後藤 (2016) ではその簡便な panopticon [パノプティコン・ミクロコスモス (小宇宙)] を提示した。Básic Énglish などで徹底的に養った English の構文力があることは前提としてであるが、大学入試や各種の検定試験にも十分対応できる。特に reading で、音感とともに各語の意味を語感として感知するレベル (deep reading のレベル) でその有用性を発揮する。活用次第ではほぼすべての英文の意味理解が可能の旨を本節冒頭で言ったが、辞典として卷末の〈索引〉を軸に、発刊以来、日常的に誰よりも最もこれを活用しているのは実は筆者自身ではないかと考えている。音感と語感を鍛える道具とし常に携えていて、確認とともに、有用性の検証を試みている。他にも応用のきく確かなその有用性には納得していて、英語語彙に関する必携書と考えているが、単に一覧されるだけではそれに気づかれなかろう。辞典として使いこなし音と意味を一体化させるのである。

慣れると実は意外に簡単なのである。また簡単に思えるようになる必要がどうしてもあると考える。原音と原義を示す PIE etymon/Basic 語／一般語の 3 種をカードに一定の数だけ書き、いわゆる「カルタ取り」による確認方法もある。たとえば各々 10 語ずつを別々のカードに書き、それをランダムに並べ置き、30 枚のなかから各々 3 枚を同系の paronym として 1 組にそろえ 10 組とするわけである。これは一人でもできる一種の簡単な言語ゲームとなる。人工知能 (AI) に学習させれば、こういうものをほぼ一瞬に処理することとなろう。

## あとがき

冒頭「まえがき」でも言ったが、本稿はフィールドワーク (実地踏査) として『忠臣蔵』ゆかりの地を 2 年余りかけ旅し、取材し、異文化間的 (cross-culturally) に何かと思惑したことが背景にある。文中で言及した史跡以外にも他にいくつもの地へ足を運び確認したが、なかでも刃傷事件後、江戸の実家に戻っていた浅野内匠頭夫人〔阿久里 (瑠泉院)〕に、大石内蔵助が吉良邸討ち入り前日の雪の降るなか、最後の別れを告げた場所と伝わる赤坂南部坂 (東京・港区赤坂) は、特別な感情を抱かせる。当時の武家屋敷一帯の地で、阿久里はこの坂と氷川神社に隣接した屋敷に戻っていた。特別に坂道が多い地で、南部坂は歩くのが難しいというわけで後には「難歩坂」と書かれもしたようで、今日その旨を記した標識も立っている。実際にこの坂を歩いてみると確かにやや歩きにくい。近くに、転びやすいので転坂 (ころびざか) という坂もある。

思い起こすのであるが、米国の文化人類学者 Ruth Benedict が彼女の有名な著 *The*

*Chrysanthemum and the Sword*『菊と刀』(1946) の中で日本文化を shame culture (恥の文化), 西洋文化を guilt culture (罪の文化) とし, 両者の文化的相違を見事に言い表した。まさに『忠臣蔵』は, 城も明け渡すことを強いたされた赤穂藩士の shame (恥・不名誉) がテーマと言える。1語の Basic キーワードで示せば, やはりサムライ魂からくる shame であろう。

今日も日本語で「彼はサムライだ」と言うことがある。これはcross-culturally (超文化的) に English では He is 'samurai'. ではなく He is a man of courage. などとなろうし, Básic Énglish なら He is a man of strong nerves. などとなろう。これらは He is a coward. 「彼は臆病者だ」の言い方の対極をなす。un-Basic 語であるが courage, coward は味のある語である。coward には, 英語民族の文化では強い語感がある。coward [cow (=tail) + ard (=person)] は「尻尾を巻いて逃げる人」の意味で, 尻尾は元は動物に関するものであった。

いずれにせよ, 英語の入門期の入り口 (way in) で「語」から入るように, 仕上げとしての出口 (way out) はやはり「語」ということになろう。既知の語 (既知だと思っている語) も Basic 語を軸にすべて洗い直していくとよいと本文で言ったが, 音感と一体化した語感の獲得のためにには小説など文学英文 (literary English) のうち, 文体的に readability (可読性) のあるものを, 筆者独自の言葉で言えば「音的リズムに乗り耳で読む」(これを rhythmic reading through the ear, また Básic Énglish で through-the-ear reading done to rhythm とも言っておくが) 速読即解の反復読みがよい。感情を排除した時事英文 (news English) などより手早いとも言える。しかし, トランプ米国大統領がインターネット Twitter 上で連日刻々と発信する英文などは感情移入をする, くだけた, こなれた, 粗野でぞんざいな言葉使いの時事英文例として大いに参考となる (日本人で連日これを追い, 日本語に翻訳し, 刻々とネット上に流している人もいる)。

本稿で注目した小説風の Allyn, J. (1970) は, 扉の頁で日本文化での proverb (金言) として次のものを提示した。それを引用するとともに若干の注釈を加え締めくくりとしたい。

*Among flowers, the cherry blossom;*

*among men, the samurai.* — Japanese proverb

米国人の彼がこれを日本の proverb, すなわち一大スケールをもつ元禄時代物語『忠臣蔵』と絡めた1つの saying としたところは興味深い。ここで人の samurai とともに, 花の cherry blossom が対比されている。日本人は英語で cherry と聴けば瞬間に桜の花をイメージするが, 英語民族にとっての cherry とは単に「サクランボ」のこととなる。cherry blossom が「桜の花」となる。また, Ruth Benedict が注目した花の菊は日本人にとっては天皇家のイメージとも結びつくが, 一般に「花」といえばやはり日本人にとっては「桜」ということになる。元禄15年12月14日 (1703年1月30日), 吉良邸討ち入りに成功した大石内蔵助ら47人 (46人?) の赤穂侍 (Ako samurai) は, 約1ヵ月半後の元禄16年2月4日 (1703年3月20日), まさにこの桜の花のように散っていったことになる。

## 参考文献

Allyn, J. (1970) *The 47 Ronin Story*. 22nd ed. (1997) C. E. Tuttle Company, Inc., Tokyo.

後藤 寛 (2016) 『必携 最小限の語彙力で英語を読み, 聽く方法: 基礎語からの類推』 (*Getting the Root Sense of the Basic Words of English*) 松柏社

- 後藤 寛 (2017) 「PIE (印欧祖語) の Etymon (語根音形) から把握する Basic 語彙と英語の Lexicon」  
*Year Book No. 69*, pp. 31-46. GDM 英語教授法研究会／日本ベーシック・イングリッシュ協会
- Shipley, J.T. (1984) *The Origins of English Words: A Discursive Dictionary of Indo-European Roots*. The Johns Hopkins Univ. Press, Baltimore.
- Watkins, C. (2011) *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*. Houghton Mifflin, Boston.

## 発音クリニック雑感

麻田 晓枝

英語の学習において、発音は大切な要素の一つだと思います。英語として最低限の「音」を身につけないと、相手に全然通じないこともあります。遙か昔、初めてアメリカに行った時のことです。ハワイで、“Where are you going next?”と質問され、“Los Angeles”と何度も言つても通じなかつたのでした。日本語的に「ロス アンジェルス」と。すると、十数回以上言つた末にやっとひらめいてくれて、「アア！ロサンゼリーズ」と。発音と共にどこを強く言うか、イントネーションも大切な要素であると思います。私自身の中学校・高校時代の英語の時間を見出しても、発音やイントネーションに関する記憶はありません。

鳥飼玖美子著『本物の英語力』の一説に次のような記述があります。「日本の学習者の多くは学校で英語の発音をきちんと習っていません。中学という外国語学習には最適な時期に、なぜ発音の基礎を教えないのか不思議でしたが、理由はどうやら英語教員養成にあるようです。現行の英語教職課程では、「英語音声学」が必修科目ではないのです。－略－ オンラインで実施された「英語音声教育実態調査」では、英語の発音指導に自信のない先生が中学で約36パーセント、高校で約20パーセント、そもそも自分の発音に自信のない先生が中学で約48パーセント、高校で約20パーセントとの結果が出ています。」

GDMでは、教え方だけでなく、音声面にも力を入れていると思います。御殿場でのサマーセミナーに初めて参加した時のことです。GDMの理論やトレーニングと並行して、「スピーチ・クリニック」というプログラムが設けられているのを見て、どんな事をするのか良く分かりませんでした。指定された時間に行くと、数行の英文パッセージを読んだ後、個々の単語の発音だけでなくイントネーションやリズムを繰り返し、徹底的に矯正して頂きました。額や背中から冷や汗の出る時間でした。指導して下さる講師の皆様も、次々と来る受講者を相手に、大変な作業だったと思います。普段、気を留めずに読んでいた英文に、目からうろこが落ちる思いでした。その後の授業や発話の時には、指摘して頂いたことを思い出しながら気をつけるようにしています。現在も開催場所は変わったものの、サマーセミナーはずっと続いており、発音講座も主要なプログラムのひとつになっています。

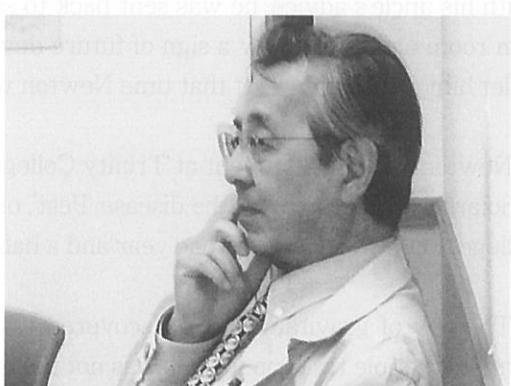
サマーセミナーだけでなく、春の京都での初級・中級セミナーの時にも音声に関する講座の時間が持たれています。東日本支部では、年に1回発音ワークショップが開催されています。

西日本支部では、もう十数年にもなるでしょうか、月例会の開始前のわずかな時間に「発音トレーニング」の時を持っています。中郷安浩さんの指導のもとに、音の仕組みを学び、ディクテーションにより、リズムやイントネーションに関心をもつようになりました。ニューズレターの書面では、伊達民和さんの「音法講座」が長く連載されています。音声指導では、村上光久さん、中郷慶さん、近藤ゆう子さん、故原田弘さんにもお世話になりました。

*English through Pictures Book I* の始めに出てくる “I am here.” という、わずか3語の文章でも、各語の発音とイントネーションの違いで、異なったニュアンスになってしまいます。いかに、発音が大切なのが実感されます。教える立場にある私達は音声面にも意識を持って、発音指導に自信のある先生になりたいものです。

## 参考文献

鳥飼玖美子『本物の英語力』(2016) 講談社現代新書 p.24, 2015年



発音ワークショップ

# Sir Isaac Newton

短文叢書

加藤准子

There is a quiet country town named Woolsthorpe, 200 km north of London. In this town there is a tree named 'Newton's Apple tree'. This is the tree from which an apple came down on Newton's head. That is the story. It may not be true, but the story is not far from what took place.

Isaac Newton's birth was on Christmas day in 1642 in Woolsthorp. His father took his last breath three months before Issac's birth. After two years, his mother remarried a man of the church in a nearby town. Newton was living with his grandmother in his young days. His mother came back after eight years with a little brother and two sisters because her husband had died. Newton made an attempt to be a farmer for the family, but he was no good at farming. With his uncle's advice, he was sent back to school again. A kind school headmaster, who gave him room and meals, saw a sign of future development in Newton and gave his mother a push to let him go to college. At that time Newton was full of hope for learning.

Newton became a student at Trinity College, Cambridge, in 1661. After three years, he got a scholarship. In those days, the disease 'Pest', or Black Death was spreading over Europe, and the college doors were shut for one year and a half. He had to go back to his home in August 1665.

The law of gravitation was discovered when he was in Woolsthorp. His home was on the farm with apple trees on it. This was not the only work as he did many other great works in his country days. "When I was back on the farm, I was full of power for forming new ideas. This was the most creative time in my life." he said later. He was 23 ~ 25 years old.

## The moon is falling down

A question came into his mind when he was looking at the moon going round the earth. Why does not the moon come down? Young Newton kept that question in his mind all the time. The moon keeps going round the earth. The apple and the moon: Do these two motions have the same cause? The moon is falling down to the earth at every second! That is the answer he finally got. His thought was guided by books by Galileo, Kepler and Descartes. Galileo's death and Newton's birth were in the same year, 1642. Galileo said that a thing goes in a straight line at the same rate if there were no friction. For example, a polished ball keeps going on the face of smoothly polished ice. With that knowledge, a new idea came to his mind. It must be the same with the moon. If there were no pulling from the earth to the moon, the moon would go off in a straight line. But the moon does not. It keeps going round the earth. It is because the moon is pulled to the earth. This natural law is true of the sun and of all the other planets: "All bodies

give effect one another, in proportion to the product, and inverse proportion to the second power of distance between them."

### Dr. Barrow's surprise

Men of mathematics had been attempting to get the size of a circle for a long time. No one was able to do that before Newton. He did other things; making use of a prism by getting seven colors of the rainbow from a ray of light and then putting them back to a ray again with another prism. He had an idea for a telescope, Newton's reflecting telescope. Every one of his attempts was outstanding. He went back to Cambridge in 1667 with all those studies in his hand, when he was 25 years old. Newton's discovery was highly valued by Dr. Isaac Barrow who was his teacher at the college. Newton was given the name "Fellow" at Trinity College. This is an assistant teacher or leader of the students.

A Fellow got 100 pounds a year. His mother said to him, "You may make use of it all for yourself." So he put all the money for getting instruments needed for his experiments, and made his idea of the telescope into a real one. Dr. Barrow was a great man of science and mathematics. Newton's interest in optics was led by him. When Newton came back after his winter holidays in Woolsthorp, Dr. Barrow said to him how deeply he was moved by his papers. Barrow's 25 year old student had made many questions clear, which nobody had ever been able to do. He was certain that Newton was ready to take his place as a professor. After two years, Barrow gave up his position, and Newton became a new professor at Cambridge at the age of 27 in 1669. It was 8 years after he had come to Trinity College.

### PRINCIPIA—our treasure

He gave all his time to his scientific studies. That was his only pleasure. He didn't have any desire to be famous. He had not put his important work such as Gravitation in public yet. His friends, who saw the value of Newton's study, gave a push again and again to make his great discovery public, and finally Newton sent his paper to the Royal Academy in 1685. He put all his study and ideas in the book PRINCIPIA, which was made public in 1687. Later this book gave ways for other discoveries to come, such as Halley's Comet, the existence of Neptune, and so on. With his discovery, we became clear about the motion of all the planets in space. It was certainly the greatest step in the history of science. (by Mori Izumi, "Newton"—Premiere Issue 1981)

---

*English Through Pictures Book II* の p.86 に "Sir Isaac Newton, the great man of science." とあるように、Newton (1642–1727) の物理、自然科学や数学など科学の分野での研究業績は多大な物であり、今日の科学の基礎となっています。その中のひとつ『万有引力の法則』を EP Book II の pp.86–87 では、中学校レベルの英語で説明がなされているのは驚きでした。基礎的な単語を使って簡単な構文でクリアに言い表されている文は、すんなり頭に入りました。難しい科学も BASIC ENGLISH を使えば、親しみのもてる分野になるのでしょうか。（麻田暁枝）

(以下は、編集者による追加)

Here is Sir Isaac Newton,  
the great man of science.  
Newton had a great  
mind.



He is under an apple  
tree.

It is the year 1666.  
Those are apples which  
are over his head.

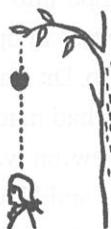
The seat has three legs.



Here is an apple which  
was over his head. The  
apple was on a branch  
of the tree.



The apple came off the  
branch. It came down.



It came down on  
Newton's head.



Growing in a courtyard garden in the Physics Department here in the University of York we have a grafted cutting from an ancient apple tree which still survives in Newton's garden at Woolsthorpe Manor, his birthplace in Lincolnshire. This is the tree from which it is reputed that Newton saw an apple fall in the late summer of 1666 and which caused him to speculate upon the nature of gravitation. Our tree was given to us by Kew Gardens in 1976.

# 大学入学共通テストへの、外部試験導入の動き その問題点

中山 滋樹

## 〈項目）

### 問題点 1~3

- A. なぜ、新テストにしたいのか
- B. 日本の状況 外国語教育、大学入試への外部テスト導入について
  1. 民間教育産業の、「特需」
  2. 様々な問題
    - (あ) 「公教育」の概念はどこへ？
    - (い) テスト問題そのものについて
    - (う) スピーキングを入れるためという理由での、外部試験導入
  3. 外部テストへの丸投げをしないことは、可能か
  4. 旧来の日本のパターン「目標＝高得点」を変えられるか、捨てられるか。

現在のセンター試験が、2021年4月大学入学者から新テスト（大学入学共通テスト）に変わることになった。これは様々な問題をはらんでいるのだが、英語テストについては、数年間の併用期間の後には作成・実施を公的機関が放棄し外部試験にする、という大きな問題がある。

### 問題点 1 日本の大学入試の大枠を変えず、CEFR を部分的に真似することによる矛盾

CEFR の考え方は、日本における受験生の順位付けと選抜のための学力概念とはまったく違う。つまり、A1~C2 の 6 つのグリッドも、順位付けに使われることは想定されていない。それにもかかわらず、日本の受験生を 6 グリッドに振り分けるだけの英語テストは、大学側の合否判定資料として使い道はあるのだろうか。国公立大学では、外部テストの他に共通テストも必須と発表した。合否判定にはそれを使うのである。

### 問題点 2 ひとまとめに 4 技能を判定

言葉の能力について、多様な事柄の「～できる」を記述しているのが Can Do リストであり、本来はそれが主体である。それをひっくりめで、リーディング力はだいたい B1、などとするのも、ざっくりとした目安であってかまわないものである。ところが、CEFR が 4 技能（スピーキングを 2 つに分けると 5 技能になるが）すべてを対象に入れているという理由でスピーキングを入れたい、それを根拠に外部試験導入、としたなら、外部試験は 4 技能別々の判定など出さないので、結果的に英語力全体をひとくくりで段階分けするしかなくなる。リーディングは B2、リスニングは B1、ライティングは B1、スピーキングは A2、のような、ひとりの人のポートフォリオに本来入れられるはずの情報とは違ってしまう。

### 問題点3 外国語は、英語だけではない

外部試験導入で話題にされているテストは、すべて英語である。他の言葉を無視するのはCEFRの根本的理念を否定するものである。現行センター試験は、英・仏・独・中・韓の5言語が行われている。複言語主義の理念に則り外部試験がある言語は基本的にすべて同じに扱うとして大学入試に利用可能にするのであれば、矛盾は解消されるが、そういう話はまだ出てこない。様々な「マイナー言語」に光を当てるための外部試験導入ならば、最初からそれを声高らかに謳い上げるはずだが、残念ながら実態は逆と思われる。このあたりからも、外部試験導入事件は、玄人である文科省内部からの動きではなく、外国語教育の素人で、CEFRの文章を読んでもいない人たちが主導している様子がうかがわれる。

現行のセンター試験を改善するというなら、当たり前だがプロの手で目的に合わせた専門的なテストを作成して導入するのが適切であって、本来無関係な外部試験導入はまったく何の改善にもならない。

#### A. なぜ、新テストにしたいのか

##### 1. 具体的モデルを求めて

「教育再生会議」という名前の組織が、どんな教育・人間を再生したいのかを具体的に提示できない。過去の20世紀前半の例は、犯罪が多い暴力的社会の時代であり、そもそも国家を被占領・滅亡させたのであるから、提示するわけにいかない。（だから幕末明治に依存する？）そのため、再生といいながら、モデルを外部に求めた。その結果が、欧州委員会（Counsel of Europe）のCEFRである。

CEFRは、言語運用能力としてInputとOutputとともに大切にしているので、それをコピーするとすれば、Outputもテストすることになる。ただ、その理念を理解できておらず基盤は古いパラダイムのままなので、理念はもちろん手法の重要な部分もコピーできない。つまり日本の新学習指導要領は新パラダイムの部分コピーを古い本に貼り付けた状態で、旧来の部分との矛盾点が多々生じている。

##### 2. PISA 対策

数字で得点と順位ができる国際比較は、分かりやすい。少なくとも、誰にでも何かが分かった気になれる。到達目標などに使うには便利である。PISAテストで高得点を取らせるには、どうしたらよいか？それには、安易に考えるなら、学校の授業でPISAテスト問題のような教材をやらせたり、類似の問題を国内の授業やテストでやる、つまり国を挙げてのテスト対策である。今でも国内の学力調査で都道府県別の順位競争を煽って、テスト対策の洗練度を競っているのと同じ発想である。それゆえ、英語以外の教科は、試行の問題からすると、PISAを強く

意識して作られている。

どのようなテストにしたいかというのは分かりやすい。似せればいいのである。本当にそれでいいのかという理念の部分と、本当にコピペできるのかという形の部分とで、それぞれ問題がある。

### 3. Speaking

英語での外部テスト導入の理由付けとして、スピーキングテストが挙げられている。

- ・言語運用能力を測るには4技能すべてを含めるべきである。
- ・しかし、センター試験で55万人に一斉にスピーキングテストをできない。
- ・だから、ノウハウのある外部試験に委ねる。

このような理屈づけが行われているが、いくつか論理の飛躍がある。例えば、本当にヨーロッパに倣いたいのなら、スピーキング評価を高等学校の内申書に記入してもらうことにしておけば済む。一斉に同じ基準でということは、学習指導要領に準拠した教科書にきちんと記述すれば可能である。民間の各テストがバラバラの方法・基準でやるよりも本筋である。

## B. 日本の状況 外国語教育、大学入試への外部テスト導入について

### 1. 民間教育産業の、「特需」

新テストの外部団体がシェア争いで動き出している。「特需」である。センター試験の受験者数55万人が、1回だけしか受けなかったとしても、準2級5,200円で計算すると、28億6千万円となる。当然、対策本や対策講座などの収益が見込める。学校単位での、対策プログラム加入という商売もあるだろう。

テストに直結したことだけではない。本来は公的な仕事が既に民間企業に委ねられつつある。文部科学省の全国学力調査はBenesseから送られてきた。高校のデジタル化指導要録の説明会も、Benesseであった。文科省の高大連携プロジェクトで作られるe-Portfolio（デジタル化調査書・内申書データベース）もBenesseの説明会に聞きに行ったのであり、教育委員会は説明会を開かない。新テスト問題を含め、今の変更は、公的な機関が担ってきたものを民間に委ね、学校現場は民間に依存せねばならない状況を作り出そうとしている。

### 2. 様々な問題

(a) 「公教育」の概念はどこへ？

(1) なぜ税金を使わないのか。

国民の教育に投資しないのは国家の将来に投資しないことであるが、長期的な展望からは、教育投資は必須の税金支出項目のはずである。有料テストを、外国語以外の共通テストに加え

て受けるのは、日本に暮らす子どもたちである。なぜ、そこに税金を使わないのか。これは全ての子どもたちへの教育の保証という観点からも正しくない。

また、外部試験対策をしようすれば、教材費はかかるし、塾にも通おうとすれば、費用の他にも田舎には塾がないなど生徒間の不公平がさらに広がる。

## (2) 多くの外部試験は学習指導要領と無関係な内容である。

英検はもともと学校の進度に合わせて級分けされているが、TOEFLなどの検定は、その目的も、日本の学校教育と関係なく、学習指導要領と無関係に作られている。そのため、語句なども大きく異なる。そういう知識量だけでなく、出題そのものについて、まったく日本の責任官庁が関係しない、つまり責任を持たないということになる。それでよいというのは、学習指導要領の存在理由を否定することもある。

## (3) 全生徒（受験者）に共通ではない。

日本の現行のセンター試験は、全ての受験者に公平であるという利点がある。全ての子どもに、同じチャンスを与える必要はなくなったと考えるのだろうか。本来は、無料の公共テストを公的機関がおこなえばよい。

## (4) 外部試験向けの学力は、学校の授業とも、PISA のテストとも同一ではない。

外部試験は、それぞれで、対象と考える相手が異なる。目的もそれぞれ異なる。いわば、借り物で日本の子どもたちの学習成果を判断しようとする。しかし、日本の学校教育で学んだ子どもたちの成果・評価専用の問題を作ってあげるのは、教育行政の責任である。学習成果とは、学習指導要領に基づいた勉強の結果・成果であるはずだったと考えれば、結果・成果を学習指導要領と切り離すのは、学習指導要領の意義・価値を自ら否定することになる。

## (い) テスト問題そのものについて

### (1) どの外部試験を選ぶのかで、受験生は迷い、困る。

各テストは、目的も想定する対象者も異なるので内容もバラバラである。それらを均一のCEFRのグリッドに合わせるといつても、そもそも各テストの問題はCEFRに合わせて作っていない。すると、多くの受験生は「自分に有利」「安い」という理由で選び、問題の質や内容の善し悪しでは選ばないが、それでいいのか。

### (2) いつ、受験するのか。

今のところ、高3の1年間に2回受けて良い方を利用、ということを言っているが、疑問がある。高2までに、例えば英検1級を取っても、使えないのか。別々の業者のテストを受けるとき、2回に制限する根拠はあるのか。外部テストでスコアや記録を作った後の期間はどう考えるか。二次試験で英語を受験しないなら、6月の外部テストで高いスコアを取った後は学校の英語授業を捨てることができる。卒業は可能であり、その時間を残りの教科の勉強に使う方

が受験に有利だと考えうるが、それでよいと考えるのは、学習指導要領と矛盾していないか。

### (3) 問題の質

現行のセンター試験は、リーディングとリスニングのテストである。その2技能の出題として、センター英語はずいぶんよくできている。外国語教育の専門家が集まって作っているだけあって、ヨーロッパの動きを分かつて作っているから、CEFR の方向性に沿った出題であり、したがって PISA のスコアを上げたいなら今のセンター問題を継続するのが最善策である。

何をよい問題と考えるかについて、合目的性以外に目を向けると、世の中には、「…対策」「…で得点アップ！」などといった対策講座や教材が活況を呈している。そもそも、「対策すれば高得点」が本当に取れるようなテストは、ダメで不出来なテストである。規格化・パターン化しているから、対策で効果がでてしまうのであり、純粹に英語力を高めないと成績が上がらないのがよいテストである。センター問題は、英語力を上げずして得点を上げられるというものではない。つまり、専門家集団の作品で、質が高い。外部試験導入は、出題の質を下げる。

現行のセンター試験には問題もあるだろうが、全教科で約 55 万人の受験者に同じチャンスを保証する前提で作られており、1 次試験・共通試験には適切であった。記述式にしないと思考力が問えないという主張があるが、記述でも思考力を問わない出題はざらにあるし、マークシートでも思考力を問うことはできる。例えば 2018 年 1 月地理 B のいわゆる「ムーミン問題」はその例である。記述問題を含む外部試験なら思考力を問えるというような短絡的な構造ではない。外部試験を含め、全員に同じ機会を保証できないものは、大学ごとの少人数での受験用として検討するのが妥当である。

### (4) CEFR のグリッドは 6 段階しかない。

55 万人の受験者を 6 段階に分けると、実質 C1, C2 はほとんどないので、50 万人以上を 4 段階にしか分けないことになる。それで受験者の英語力評価として大学入試に使えるとは考えられない。C1 の基準を甘くしたり A1 の下位を Pre-A1 にして階層を増やすなど細分化する案が出ている。ある程度細分化しても、他教科に比べずっと大雑把な学力評価になる。

この点については、国立大学は外部試験の他に新共通テストも必須とした。実質的に、新共通テストを他教科と合わせて合否判定に使うものと思われる。私大も、英語を合否判定に使うなら同じにするだろう。

各外部試験が、それぞれどう 6 段階とすり合わせるか、その整合性とテスト同士のずれはどうするか、という問題もある。他社より多く受験者を集めるため、ハイスコアを出し合うインフレの発生が予想されている。実際、CEFR の 6 段階との対照が、数年前のものと現在とで変わっている例がある。

文部科学省の「英語教育の在り方に関する有識者会議英語力の評価及び入試における外部試験活用に関する小委員会（第 2 回）議事録」を読むと、安河内委員の発言で、各団体の CEFR 対照は自己申告では信頼性に疑念があること（だから対照表を別組織で作る）、また、英検協会には、英検の内容を CEFR の基準に合わせて変えてほしいと要求していることが分かる。後者は特に疑問がある。外部試験の方が、大学入試用に自分を変えてしまうのでは、それまでの自分は何だったのだろうか。理念や理想はなかったのだろうか。そして、もし CEFR 対照

の問題作成に特化するものを作るのなら、その他の外部試験は不要で、英検一本にしたら不平等問題は消滅する。一本化という方向になるのだろうか。

#### (5) 外部テストは4技能をひとまとめに判定するが、それはCEFRと違う

CEFRのグリッドは、各個人の様々な言語能力について、「～することは、○レベル」「～することは、□レベル」という個別の判断基準という部分があるはずだが、日本では、なぜか英語力全部をひっくるめて6段階に押し込もうとしている。ひっくるめて判定する各外部試験が導入可能であるという誤解も生じている。誤解というのは、CEFRでは個別の項目の能力をPortfolioに入れるのが目的だからである。それを日本でも真似るなら、せめて、Reading: B2, Writing: B1, Listening: B1, Speaking: A2くらいに、個別の段階分けをするのが本来の姿ではないだろうか。

もちろん、これは、「Speakingを入れるために既存の外部試験を導入する必要がある」という根拠を揺るがす部分である。

#### (う) スピーキングを入れるためという理由での、外部試験導入

4技能を試験するから、経験がある外部試験に任すという理由付けがなされている。つまり、スピーキング・ライティングのテストを入れたい、ということである。しかし、これは、従来の科挙的な統一テストのパターンに囚われている。もし日本の旧来の方式を世界標準に変えていくというなら、調査書重視にすれば解決することであり、外部の4技能一括のテストに頼る必要は、元から存在していない。

Speakingの試験で何が測られているかを、簡単に考えてはいけない。時には性格に得点を付けることになっていることを忘れてはいけない。例えば、人見知りの生徒は学力が低い、という結果が出てしまうのは間違っている。もちろん、企業が便利に使える“グローバル人材”としての尺度では評価が低いのだろうが、それは学力とは別の話である。

一般の外部試験のSpeakingは「言われたことへの反応が器用にできるか」という面が測られる。つまり、Schizothymia（分裂気質）が強いと有利、弱いと不利である。じっくり深く考える慎重な性格は、不利である。それは英語力・言語能力の測定とは違う。皮肉なことに、言葉を常に推敲している文学者タイプに口が重い人がいる。このタイプの生徒は、言語の能力が高すぎるせいでスコアが下がると予想される。

業者テストが、Speakingに関する多様な能力のどの部分を測っているのかについても、考えておかねばならない。Speakingのテストについて、評価はばらつく、という批判がある。それに対して、外部試験は、測定したい項目が正しく評価できていることを統計的に明らかにできていると主張している。これはもちろん、評価のぶれが出にくい事柄に絞っておけばそういう結果になる。Speakingの様々な面の、限られた部分を判定しているものを、うっかりSpeaking能力全般の評価のように勘違いしてはいけない。

例えば、意外にも発音はあまり評価に含まれないようである。試験で、例えばスコットラン

ド訛りや Oxbridge の受験者に、発音ゆえに Speaking の能力が低いと判定するような失敗を避けるためには、そうなるのかもしれない。発音や Prosody に関しては、評価の均一性が取りにくいかから、項目から外してあるのだろう。しかし学校では多くの先生も生徒も音読等努力しているし、学習指導要領も音を無視してはいけないという意向と読み取れる。そもそも音声軽視は非実用英語的学習ということではなかったのか。この矛盾は放置していいのか。生徒が頑張ったことを評価しないのは、教員には抵抗があるのだが。自分で Speaking を教えたり評価したりしたことがない人たちでないと、Speaking を入試に組み込むために外部試験を導入しようというような雑な論理・主張にはならないのではないか。

### 3. 外部テストへの丸投げをしないことは、可能か

CEFR を真似るなら、Speaking, Writing は入れたくなる。それを考えなくとも、Output を学校教育で勉強し、また評価もするのは、自然なことである。

民間に投げてしまえば Speaking を自前でやらなくてもすむし責任も回避できるが、上記の問題がある。そもそも、民間に投げないで済む方法も考えられる。

例を挙げると、Speaking は、「新・調査書に評価記入欄を設け、評価記入事項とする」。

2020 年度から始まる、調査書類のデジタル化にあわせて、授業評価を入試の判断材料にすればよい。

Speaking 能力については、英語表現の授業で A1 レベル～C2 レベルと 6 段階で内申評価をつける。（実質的には A1, A2, B1, B2 以上、の 4 段階かもしれない）どういう能力をどう測るか、そのためにどういう学校教育をするかといったことが、学習指導要領・検定教科書のもと一貫性をもって全国で授業内に無料でおこなえればよい。基準統一、つまり学校によって甘く評価しそうないようにする為には、例えば教科書の中の統一課題のパフォーマンスをビデオに撮って保存・提出する、などの対策をする。Writing についても、同様に「新・指導要録」「新・調査書」を使うこともできるし、Writing, Reading, Listening の 3 技能を共通テストで他教科と同様におこなってもいい。

各学校で、自分で原稿を好きなだけ長く書いてスピーチさせる課題なら、生徒のコミュニケーションにおける要領の善し悪しという面に左右されすぎずに、Speaking, Writing の両面で、実力に相応しい評価がつく。ここは各学校の現場の先生達に任せるのが適切であろう。

もちろん、単純に Speaking 単独のテストを早い時期におこなって、後で一斉におこなわれる共通テストに加える形でもよいだろう。Speaking を分離させれば、あえて外部試験に依存する必要は何もない。

#### 4. 旧来の日本のパターン「目標＝高得点」を変えられるか、捨てられるか。

学習指導要領その他で、新しい考え方へ変わらねばならない、と現場の教員は上から目線で言われるのだが、そう言っている人たちが未だに、達成目標を作つてそれに追いつけるという旧来の枠組みから出られないでいる。他人に変われと命じる前に、自分を変えることに熱心になるべきだろう。現在の「教育改革」関係者が、本当に変えたいと思っているか。「再生」と言っている時点で、既に自分が知つてゐる概念にしがみつきたいという願望が露出しており、その気が無いのは明らかである。

そして今、形だけ部分コピーをしようとしているヨーロッパの方向性は、複文化主義(pluriculturalism)・複言語主義(plurilingualism)である。これは、自分が知らない、分かつていなことを受け入れる準備ができていることを知性と考え、それに至ることを教育目標の要所とするものである。私は賢く我は正しいという自己認識とナチュラルの親和性を理解し、その拡散を防止するための、つまり平和のための教育、という考え方によるものである。「無知の知」を深化させていると言えるだろう。

「無知の知」を学ぶ教育のあり方、という視点を、どれだけ日本の立法・行政が持つてゐるのか、はなはだ疑問である。それは、上から与えた達成目標への到達競争ではないからである。

日本のような科挙的試験向け学力観と受験システムを、本気でやめるとしたら、たとえばアメリカのような内申書重視、フランスのような論文重視を日本で受け入れようということだろうか。日本では、高校では全国的に推薦入試を廃止する県が増えているのと対照的に、大学は推薦入試合格を増やしている。国公立も増やす傾向にある。受験生にとって条件が同じでないことを受容するという共通理解がどこかでなされたのだろうか。アメリカ型書類面接重視は、当然、目立つ活動・実績を、推薦書が上手に書ける人の元で残すのが有利になる。田舎で目立たないことをやつてると不利だが、それは多くの人々の美德意識と乖離した価値基準である。日本の入試にそれを入れたいのだろうか。

また、「大学側が、取りたいと思った学生を取る」のであるから、本人の努力、資質、人格と関係ない理由で、例えば“珍しいから”合格したりする。つまり、大学の側の意向で恣意的に合否が決まる。このように公平性を下げることを、日本で受け入れるか、これは方針を明らかにすべきである。

アメリカ型が嫌なら、例えばフランス型はどうか。

実際の論文課題の例：

「道徳的信条は経験に基づくか。」(仏バカラレア 2016) 制限時間 4 時間

日本で、この出題をするのだろうか。実行したら大変興味深いが、採点評価は大変なことになるだろう。フランスの教育制度はよく知らないのだが、聞きかじったところでは、エリート教育を受ける少数とそうでない一般とが明確に分かれているとのことで、このような考察を日常とする学校・授業が全国で展開されているわけではないのだろう。55万人が一斉に同じテストを受ける日本とは状況が違うということか。

万が一、このように本格的な記述式出題をしたなら、採点は、まず55万人は無理になるが、少數の人しか受けられないものを許容する準備が、日本のどれほどの人にあるのだろうか。そして、実際に採点する場合にも、なにしろ4時間かけた長文の解答なので、今の日本の試験で一般的な部分点方式などは通用しない。減点方式も使えない。採点者は全体通読での総合的判断をすることになるだろう。それは、目の前に2人の文章を並べてどちらを合格させるかという検討には良いが、当然、細かな点数化・順位付けには馴染まない。それで合否が決まる大学入試を望む人がどれだけ日本にいるのだろうか。変えるとすれば、各大学・学部で2次試験を変えれば良い。2次試験なら、フランス的な4時間記述問題もやれるのである。そして「道徳的信条は経験に基づくか。」というような問い合わせならば、自分が全て分かっているという前提に立つことは不可能である。自分が少ししか知らないことを意識しながら考察する能力を問うことで、「無知の知」を学ぶ教育という視点に近づく。そのような2次試験を行おうといういう所があるならば、それは歓迎するのだが。

(都立府中東高等学校教諭)



## ある外資系企業の経営者の嘆き

伊 達 民 和

東京オリンピックに備え、文科省は「役に立つ英語」の推進に躍起になり、教師に非現実的で無茶な指導法を要求している。そもそも「役に立つ英語」とは何か。では、英語検定試験は、本当に役に立っていると言えるのか。

最近、酒宴で40年来の友人（坂田君）と久しぶりに再会した。彼は、まさに国際派のビジネスマンである。アメリカと香港で代表取締役社長の経歴がある。定年退職した後、暫らく会社の顧問をしていた。酒宴での気楽さからか、大学の英語教育について歯に衣着せぬことを言われた。特に、TOEICには批判的であった。私は、彼の鋭い舌鋒に防戦もできず、全くお手上げであった。言い足りなかったのだろう、後日、メールが届いた。

…日本人はわずか。大多数は現地の人達+欧州は雑多。もちろん米国時代には米人だけではなく帰化したフィリピン人、ベトナム人等も数多くいましたから、最初から24時間×360日、英語でスタート、英語で終わり。日本語は日本人だけでのむ飲み屋と自宅だけ。小生の今の会社は、本来、外資系企業だったため、英語、それも高得点者がワンサカいます。800点以上の取得者だけでも25人。内990点の満点保持者が3名。しかし、こんなに英語が出来る社員がいながら、海外出張に派遣できる社員、英語で相手と交渉可能な社員は2名だけ。残りの23名の社員は碌に喋れない、書かせても支離滅裂、単語のミススペルは当たり前。更に残り225名の社員に至っては、英語などは全くNG。海外拠点を作っても駐在で派遣できる社員がいない。誰にしようかと迷うどころか、そもそもいない。こういう実態を知っているので、楽天、ユニクロの社内英語統一論には全く反対。会議での英語使用の非効率はその最たるものでしょう。

これも小生の会社の実話です。会議で一人でも日本語が分からない人が混じる場合は「全て英語で行う」のが世界のグローバル企業の常識だから、会議の冒頭から3日間、全ての会議は英語でやることに決定。参加者は各拠点長（社長）+営業部長（現地の人達が多いので、当然、日本語はダメ。総勢20名弱。ここに日本の各本部からの参加者、事務局などを加えると会議全体は40名ほど。全体40名、日本語不可者5-6名。最初は、皆頑張っていたが、次第に疲労感。自分の思い、言いたい事を上手く表現できずにイライラ感が募り、最後は会議終了後に、別途、日本語で本社の我々に説明する始末。これが実態です。非効率の典型でしょう。だから楽天とかユニクロなどに騙されてはいけない。恰好をつけているだけ、マスコミが無責任に煽っているだけのこと。

小生自身は一度も受験したことのないのにこれまで長い間社員に取得を呼びかけてきました。あの「黒マークで塗りつぶす」事が嫌いで。それがどんな問題か、どのような雰囲気でやるのか？ listeningなどはどういう環境の下でやるのか？ 興味が湧き、顧間に引いたのを良い機会に2016年12月に受験した。結果は840点。左耳が遠くてlisteningが

低い。感想は、英検1級より単語の数、文章の難易度は遙かに低いですね。満点も取れないくせに批評だけは一人前です。これでは想像していた通り満点でも使えないと確信しました。

TOEICなどは民間の英語業者が金儲けのビジネスとしてやっているだけ。その問題集とやらも実際の試験の中身と殆ど同じ構成、同じ設問だから、何度か受検すると要領が会得できて、3時間の持ち時間内に全てを回答可能になる。次第に点は上がるだけのこと。知り合いの人がこれでマスターした。彼に1つのテーマで思っている事を2-3枚でwritingをしてもらうと、文章にならず、論理的な構成にもならず、支離滅裂だった。

TOEICには中学生も多く受検。多分帰国子女などは6年生ぐらいなら990点の満点は取れます。なにせ考える必要はなし、むしろ考える時間はなく、パッパッと黒く塗りつぶすだけですから。小学生、中学生と同じレベルのテストを受けて何が面白いのか？ 馬鹿にしていますよ。満点は、「reading, listening, speaking,そして最も大事な writing の能力の総合点として評価する」としないと。伊達さんが添付されたファイルの中に「(注) 杉本先生が「日本人は英語で筋道の立った文章を組み立てる訓練が欠けている。まとまった文章が書けない」と言うくだりがあります。

(注：日本の社会学者。オーストラリアのラトローブ大学名誉教授。朝日新聞に掲載された記事「話す力より「書く力」(2000.4.14)）

何が大事と言って、この「きちんとした文章が書けるかどうか」。これが最も大事。米国でも英国でも「自分の言いたい事、考えている事を logical にきちんと文章で書ける能力があるかどうか」が全て。これは大学でもビジネスでも全く同じです。交渉時でもその場で minutes なり、MOU / MOA (Memorandum of Understanding / Memorandum of Agreement) のドラフトを書いてお互いに確認サインし、後で正式にタイプして交わすとか、メールでの交渉でもきちんと交信するのが普通。speaking も大事ですが、writing 能力は必須です。

毎回毎回、“衝撃的な”事を書いて済みません。でも小生が書いている事は決して飛躍もせず、浮かれもせず、ごく普通の感覚で書いていますけどね。大学の先生が一番声を大にして TOEIC を非難すべきではないでしょうかね。非難はしなくとも大学で TOEIC など教えてはいけません。今大学では TOEIC を教えているんですか？ 信じられないです。就活に必須であれば、それは学生が自分で勉強することであって、大学で教えることではないと思います。これ以上メールをかわすと普ツンしそうだから、ここら辺りで擱筆としましょうか。伊達さんとはこれまで全くこのような会話をしたことがなかったので色々新鮮でした。

以上は、5回のメール交換で彼が主張した内容の抜粋である。確かに、私たちは、楽天やユニクロに惑わされている。一方、マイクロソフト社の代表取締役社長であった成毛真の著書(2011)の一部をかいづまんで紹介すると、英語を社内公用語にすることはあり得ない。今ま

でも、これからも社内では日本語が公用語である。楽天では、社員食堂のメニューはすべて英語となり、ブリの照り焼きは salt-broiled yellowtail という。これでは、日本人も外国人も何のことか分からぬ。資料も英語で作成し、会議では日本人が拙い英語で話し合っているらしい。これは全く非能率的であり、普段の業務で手一杯の社員にどれだけの負担になっていることか。ある楽天の社員が「重要なことなので日本語で失礼します」と言ったとネットで書き込みがあつたらしい。もしこれが本当なら最高のギャクだと思う。私は、以前に、安達洋『日産を蘇らせた英語』(光文社、2004) を疑心暗鬼で読んだことがある。企業内の英語使用の実態の真偽に首をかしげている。はたして英語ごときが会社を蘇らせることがあり得るのか。

英語に関する文科省の言語政策は、現実無視で、まことに危うい。特に、小学校での英語学習は、「ゆとり教育」の轍を踏むのが、火を見るより明らかである。中教審「外国語専門部会」の21名の委員は、どんな「英語人生」を歩んできたのだろうか。彼らは、大学教員14名、小中高の校長や教員4名、その他NPO関係者3名らしい。ひょっとしたら、委員の中には、言語理論のABCsも分からず、自分は英語が話せず苦労した反動により、こんな愚策を提言している人がいるのではないだろうか。小学校での「英語活動」に賛同するのは、そんな苦労をした人たちだ。しかし、小学生の間では、既に英語嫌いが広がっている報告が多い。小学校では、児童は3年生からクラス担任等から英語に触れ、5年生からは成績評価する教科として英語を学ぶ。この流れに乗って、中学校でも「英語を英語で教える／学ぶことを基本とする」。英語を英語で教えると言っても、approachであって method はない。だから、GDMとは全く次元が違う。そして、高校卒業時には、英検2級～準1級の英語力を目標とする。ちなみに、年々、英検2級の合格率は約25%で、準1級は約15%である。こんな目標は、絵にかいた餅であることは誰でも分かる。

『週刊ダイヤmond』誌(2014.8.23)によると、楽天では、2014年7月から社内の英語公用語化をより一層進めるため、社員全員に対しTOEICのスコア800を2年以内に達成するようにと方針を掲げた。しかし、友人の坂田君からのメールにもあったように、800を到達しても前途遼遠であろう。まず、「書く力」が測れない。昔の大学入試の英語では、和文英訳と英文和訳の問題があったが、将来のセンター試験では、これが復活するらしい。採点が大変だろうが。和文英訳と英文和訳は、本当の英語力を図る尺度である。

私は、10年も前から、兵庫県にある芦屋聖マルコ教会の信徒から成る「翻訳の会」の支援をしている。メンバーは、元ビジネスマンの高齢者(写真)である。既に5冊出版している。



勿論、牧師の助言を受けている。翻訳書が出来上がると、それをもってイギリスまで飛び、著者を表敬訪問している。昨年は、ケンブリッジ大学のモーズリンコレッジに行き、第104代

目カンタベリー大主教であったローワン・ウイリアムズ師（写真、現在は学寮長）を訪問した。翻訳の会のメンバーの英語の発音は和式で、会話は流暢ではないが、読解力は大したものである。文法力がしっかりしているからである。これで海外においてビジネスをやってきた。

1989年告示の中学校学習指導要領から以降、文法・読解中心主義が否定され、コミュニケーション重視の英語教育にするようになった。しかし、これまで中学校と高等学校での総英語授業時間は、6年間で約600時間、大学の授業を入れても、せいぜい1,000時間程度である。これは日常生活の約42日分でしかない。相撲の外国人力士が示す驚異的な日本語習得は1,000時間どころではない。生活を賭けて死に物狂いの努力の成果である。四六時中、日本語漬けである。僅か1月半の英語学習で、たとえ片言でもコミュニケーションができるはずがない。だから学校は基礎を教えるところである。東京オリンピックに向けての英語教育を目標とするものでない。文法の学習段階を無視した対話文を機械的に暗記という、ライブではない学習はあまりにも空しい。学校では、文法で英語の語順や枠組み教え、使い方のルールを教える。ところで、コミュニケーション重視の一環として、センター試験にリスニングを導入したけれども、日本人のリスニングの力は上がっていないという学会発表がある。高校でリスニング対策がなされているだけである。TOEICで満点を達成しても、話せない人が多いと巷間では言われている。しかし、堪能な人も多い。TOEICがダメならTOEFLではどうか。これは、英語圏の大学へ留学・研究を希望する者を主な対象とした英語能力を測定するテストであり、一般的でない。巻頭の言を思い起こして欲しい。文法指導や訳読指導には功罪があるが、マイナス面があるからと言って、プラス面を全否定するのは間違っている。最近よく聞くのは、これまで悪者にされてきた伝統的な英語指導の良い点である。皮肉なことに、私の元勤務大学のアメリカ人教員（在日35年以上、日本人女性と結婚している）が、今日の文科省の方針について呆れて、“The English education is going to the dogs.”と言ったことがある。彼は、リアリストである。learning Englishとacquiring (picking up) Englishとの違い、the English educationとEnglish teachingとの違い、また、ESL (English as a second language)とEFL (English as a foreign language)の違いをよく理解している。今日、これが、ごっちゃになっている。ところで、先ほどの成毛真の著書名は『日本人の9割に英語はいらない』である。こんなセンセーショナルなタイトルは、注意を引くために出版社（祥伝社）が考えたタイルだろうが、読む価値のある本である。

## ◆◆◆東日本支部活動報告◆◆◆

(2016年8月～2017年7月)

### ■2016年

8月 13～15日	夏期英語教授法セミナー オリンピック記念青少年総合センター	
9月 3日	月例会 東京芸術劇場 デモ which (rel)	田中 大介
	Basic Basic English/200 Pictured より (b)	
10月 8日	月例会 目黒区中小企業センター デモ Because, Why? (EP 2 pp. 55, 67)	多羅 深雪
	トーク 「GDM の教えてくれたこと—動詞と句動詞の違いを通じて」	黒澤 文子
11月 19～20日	東西支部合同開催 秋のセミナー／月例会 邦和セミナープラザ（名古屋）	
12月 24日	月例会 三田いきいきプラザ デモ near, far (EP 2 p 64)	前勝 和代
	Basic Basic English/200 Pictured より (c)	

### ■2017年

1月 21日	月例会 三田いきいきプラザ デモ by, going to, journey (EP 2 p. 2-3)	伴野 温子
	Basic Basic English/200 Pictured より (d)	
2月 11～12日	Basic English Workshop／月例会 オリンピック記念青少年総合センター	
11日	デモ "Used train carriages making a journey to overseas" デモ "Tree-top House"	千葉 洋子 松川 和子
3月 25日	初級セミナー／月例会 オリンピック記念青少年総合センター 外国語／GDM セオリ一 最初の授業 デモ take デモ go	伴野 温子 服部 正子 加藤 准子 黒瀬 るみ
4月 22日	教師養成コース／月例会 三田いきいきプラザ 外国語／最初の授業 トーク GDM とは グループワーク	加藤 准子 唐木田照代
5月 7日	教師養成コース 東京芸術劇場 デモ This/That, a, my, your, his, her トーク 授業解説	黒瀬 るみ 加藤 准子

	グループワーク	
5月 20日	教師養成コース／月例会 オリンピック記念青少年総合センター	伴野 溫子
	デモ in, on, the	
	トーク 教材、写真、絵について	黒瀬 るみ
	グループワーク	
5月 27~28日	GDM 発音ワークショップ オリンピック記念青少年総合センター	
6月 11日	教師養成コース 東京芸術劇場	伊藤千津子
	デモ take	
	参加者の授業	
	トーク 実践報告	新井 等
6月 24日	教師養成コース／月例会 オリンピック記念青少年センター	
	参加者の授業	
	デモ of	新井 等
	トーク 実践報告	唐木田照代
7月 22日	月例会／総会 津田塾大学同窓会会議室	
	トーク English through Pictures を正しいイントネーションで 読む	近藤ゆう子
	総会	

### ◆◆◆西日本支部活動報告◆◆◆

(2016年9月～2017年8月)

#### ■2016年

9月 10日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ which (relative) (EP 1, p.50)	麻田 晓枝
	Basic English 勉強会	片桐ユズル
10月 22日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ① where (relative) (EP 2, p.16)	上島 光代
	デモ② may (EP 2, p.63-64)	河村有里子
	Basic English 勉強会	片桐ユズル
11月 19～20日	GDM 秋季セミナー in Nagoya	
	邦和セミナープラザ	
12月 18日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター	
	HP 充実のための話し合い (有)時代工房 柴田宣史氏と。	

## ■2017年

1月 29日	月例会 デモ	大阪市立総合生涯学習センター say (EP 1, p.42.)	吉沢美穂氏のデモをビデオ鑑賞 (仮定法 if)	松川 和子
2月 20日	月例会 デモ① デモ② デモ③	大阪市立総合生涯学習センター Where? (EP 1, p.38) come (EP 1, p.61) sense (EP 2, p.121)		麻田 晓枝 山崎 典子 上島 光代
3月 18~19日	初級・中級セミナー IN KYOTO／月例会			
4月 23日	月例会 デモ	大阪市立総合生涯学習センター 現在完了		上島 光代
5月 27日	月例会 デモ① デモ② デモ③ デモ④	大阪市立総合生涯学習センター フィンランド語 I, You, He, She, It (EP 1, pp.1-2) here, there (EP 1, pp.11-12) GDM の理論		松川 和子 上島 光代 上島 光代 山崎 典子
6月 18日	〈GDM 初級セミナー〉	大阪市立総合生涯学習センター (1) GDM による外国語の授業 (2) GDM の理論 (3) 模擬授業：①I, You, He, She, It ②here, there (4) 授業案作りとライブ『take の 3 時制を教える』+ 『take の導入 (DVD)』		松川 和子 山崎 典子 上島 光代 松浦 克己
7月 8日	月例会・総会	大阪市立総合生涯学習センター may (EP 2, p.63) Writing Workshop と GDM		此枝 洋子 吉沢 郁生
8月 13日～15日	西日本支部総会 GDM 英語教授法サマーセミナー 国立オリンピック記念青少年総合センター			

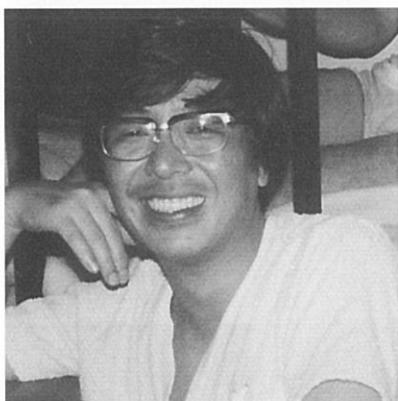
## ◆◆◆編集後記◆◆◆

今回は、3月末の締め切り日には、原稿が1点しかなく、4月末まで引き延ばした。このような事情もあり、急遽、原稿を依頼したので、本号は、GDMとBasic Englishとは直接に関係のない記事も多くの紙面をとっている。原稿さえ集まれば、編集の作業は8割程度終わつたようなものである。ゲラの校正が2回あり、しかも、執筆者の責任でやってもらえる。Year Bookの紙面が文字や表、図で埋め尽くされ単調な印象を与える解消策として、また、余白を埋めるために写真を挿入している。ただ、最近は誰もが肖像権に敏感なので、危ない橋を渡つてはいる。学生の教育実習期間中に訪問指導に行き、写真を撮るときも、担当教員から教室の後ろから撮影するように言われる。勿論、個人の顔の大写しは許されない。GDMセミナーでは、そこまでは厳しく言われないと思うが、写真に顔が入らざるを得ない。GDMは何といってライブが真髄であり Seeing is believing. なので、写真を多く掲載するのが得策だと思っている。

前回の編集後記でも書いたが、GDM実践者は、まさに「伝道者」である。これまで、どれほど多くの教授法が紹介されて、泡沫のように消えていったか。GDMは、「しぶとい」教授法で、しっかりした理論と理念によって支えられて奥深い。何と言っても権威の象徴である「教祖」がいらないのが素晴らしい。今年は、GDMサマーセミナーが始まってから50周年を迎える。ご同慶の至りである。その中、約40年間は「御殿場セミナー」という懐かしい名前で呼ばれていた。グループ写真の方々は、中郷安浩さん、吉沢美穂さん、東山 永さん、升川 潔さん、蓑田兵衛さんである。そして、右の写真は、片桐ユズルさんである。



以下のグループ写真は、相沢桂子さんとスタッフの方々である。御殿場にて。



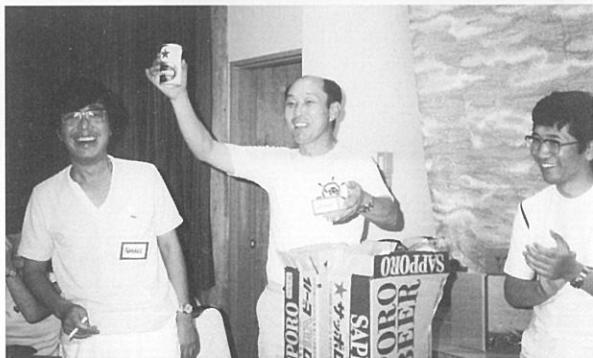
中郷安浩さん



### 10周年記念パーティー（1978）



男性ファッションショー



岩坂正雄さん（YMCA）